[head](file:///E:\岩倉紙芝居\koten\koten.htm)（岩倉紙芝館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　宰主　上田啓之）

論註　藤点　　　  
楊氏曰、聖人之所謂道者、不離乎日用之閒也。故夫子之平日、一動一靜、門人皆審視而詳記之。尹氏曰、甚矣孔門諸子之嗜學也。於聖人之容色言動、無不謹書而備録之、以貽後世。今讀其書、卽其事、宛然如聖人之在目也。雖然、聖人豈拘拘而爲之者哉。蓋盛德之至、動容周旋、自中乎禮耳。學者欲潛心於聖人、宜於此求焉。舊說凡一章、今分爲十七節。  
楊氏が曰く、聖人の所謂道は、日用の閒を離れず。故に、夫子の平日、一動一靜、門人皆審らかに視て詳らかに之を記す。尹氏が曰く、甚だしきかな孔門諸子の學を嗜めること。聖人の容色言動に、謹みて書して備（つぶさ）に之を録して、以て後世に貽（のこ）さざること無し。今其の書を讀み、其に事に卽きて、宛然として聖人の目に在すが如し。然りと雖も、聖人豈に拘拘として之をする者ならんや。蓋し盛德の至り、動容周旋、自（おのづか）ら禮に中（あた）るのみ。學者心を聖人に潛（ひそ）むことを欲せば、宜しく此に於て求むべし。舊說は凡て一章、今分ちて十七節と爲す。  
■この篇は、下克上が起る世、朝聘の礼が有名無実となる時に、孔子がその礼を身を以て示されたのであろう。朝の根底には君臣の礼があり、聘の根底には相互の信頼関係の醸成の礼があり、かくして天下の秩序と安寧を確保する周の統治システムであった。それが春秋末期には、崩壊していた。■何晏は、論語集解に「凡そ一章」と記す。■皇侃は、論語集解義疏に、「郷黨は孔子が教訓郷黨の時に在すを明らかにす。前者に次ぐ所以。既に朝廷感希。故に退還して郷黨に應ず。故に郷黨子罕に次ぐ」と記す。■邢昺は、論語註疏（正義）に、「此の篇唯に孔子が魯國に在して郷黨中の言行を記す。故に之を分けて以て前篇に次ぐ。此の篇一章と曰ふと雖も、其の間の事義亦以て相從ひて類す。今各文に依りてこれを解す」と記した。  
  
○　孔子郷黨に於て、恂恂如（じゆんじゆんじよ）たり。言ふこと能（あた）はざる者に似れり。恂相倫反。○恂恂信實之貌。似不能言者、謙卑遜順、不以賢知先人也。郷黨父兄宗族之所在。故孔子居之、其容貌辭氣如此。○恂xúnは相xiāng倫lúnの反。○恂恂は信實の貌。言ふこと能はざる者に似るは、謙卑遜順にして、賢知を以て人に先だたず。郷黨は、父兄宗族の在る所。故に孔子之に居りて、其の容貌辭氣此の如し。  
■周は五百家を黨、一万二千五百家を郷とするがこれは天子の制、皇侃は、諸侯の国の郷党とは区別した。孔子は魯国昌平郷辺境の陬邑の出身とされる。国都は曲阜。恂恂は、伝統的に溫恭とされてきたが、朱熹は、信實とした。恂は説文に、「信（まこと）心なり」とし、旬を「徧（あまねく）なり」とする。誰に対しても、まごころで、わけへだてのないこと。言ふより聴こふとされた。■何晏は、「王（弼）曰く、恂恂は溫恭の貌」を引いた。■皇侃は、「此の一篇、末に至り竝びて孔子平生の德行を記すなり」、「於郷黨とは、孔子、家に還り郷黨に教化するに中（あた）る時を謂ふ。天子の郊内に郷黨有り。郊外に遂鄙有り。孔子、魯に居す。魯は是れ諸侯。今云ふ郷黨、當に諸侯亦郊内に郷を爲すことを知るべし。郊外を遂と為す。孔子が家當に魯の郊内に在り。故に於郷黨と云ふなり。 恂恂は溫恭の貌。既に郷黨に還る。郷黨宜しく和恭し以て相接須べし。故に恂恂如なり。 既に其れ溫恭。則ち言語は寡少。故に、一は往きてこれを觀ること、言ふこと能はざる者に似れるが如きなり」とした。■邢昺は、「此の一節、言語及び趨朝の禮容を記すなり」、「恂恂は溫恭の貌。言ふは、孔子、郷黨の中に在し、故舊と相接し、常に溫和恭敬、恂恂然として能く言語をせざる者に似れるが如し。道其れ謙恭の甚しきなり。凡て「如也」と言ふは、皆此の如き義を謂ふ」とした。  
　其の宗廟･朝廷に在る、便便（べんべん）として言ふ。唯に謹めるのみ。朝直遙反。下同。便旁連反。○便便辯也。宗廟禮法之所在。朝廷政事之所出。言不可以不明辯。故必詳問而極言之。但謹而不放爾。○此一節、記孔子在郷黨･宗廟･朝廷、言貌之不同。朝cháoは直zhí遙yáoの反（音がはわない）。下も同じ。便piánは旁páng連liánの反。○便便は辯なり。宗廟は、禮法の在る所。朝廷は、政事の出る所。言ふと以て明らかに辯ぜずんばある可からず。故に必ず詳らかに問ひて極めて之を言ふ。但に謹みて放（ほしいまま）にせざるのみ。○此の一節、孔子、郷黨・宗廟･朝廷に在りて、言貌の同じからずを記す。  
■便は説文に、「安なり」、注に、「古（いにしへ）、平と辨と通用す。史記に百姓を便章すの如し。古文尚書に平と作（な）す。今文尚書に辨と作す。毛詩に左右を平平す。左傳に左右を便蕃すと作す。」とある。更は説文に、「改なり」とある。過ちあれば謹みて改むべきことを言ひ、君を安んじられた。■何晏は、「鄭玄曰く、便便は辯なり。辯すと雖も謹敬せり」を引いた。■皇侃は、「孔子、君祭を助くを謂ふ。宗廟及び朝廷に在す。既に君朝に在り應順酬答す。及び大廟に入りて毎事問ふべし。竝びて得て言はざることなし。言流すべし。故に便便として言ふ。言流すと雖も必ず謹敬す。故に唯に謹めるのみと云ふ」とした。■邢昺は、「便便は辨なり。宗廟は禮を行ふ處、朝廷は政を布く所、當に詳問極言すべし。故に辨治なり。辨ずと雖も唯に謹敬す」とした。  
  
○　朝（ちよう）にして下大夫と言へば、侃侃如（かんかんじよ）たり。上大夫と言へば、誾誾如（ぎんぎんじよ）たり。侃苦旦反。誾魚巾反。○此君未視朝時也。王制諸侯上大夫卿、下大夫五人。許氏說文、侃侃剛直也。誾誾和悦而諍也。侃kǎnは苦kǔ旦dànの反（声が合はない）。誾yínは魚yú巾jīnの反（声が合はない）。○此れは君、未だ朝を視ざる時なり。王制に、諸侯の上大夫は卿、下大夫は五人。許氏、說文に、侃侃は剛直なり。誾誾は和悦にして諍（言ひ争ふ）なり。  
■伝統的に、「侃侃は和樂の貌、誾誾は中正の貌」とするを、朱熹は説文により、「侃侃は剛直なり。誾誾は和悦にして諍」とした。大司寇として政権中枢におられた頃なら、それ以下の役職の大夫が下大夫、季孫氏や孟孫氏や叔孫氏の頭領は上大夫となろう。礼に則り厳しく対応された。晩年の帰国後となれば、「有教無類」であり、地位、身分に係はらず教育されており、礼に則るとはいへ、和楽を旨とされたのかもしれない。■何晏は、「孔安国曰く、侃侃は和樂の貌」、「孔安国曰く、誾誾は中正の貌」を引いた。■皇侃は、「侃侃は和樂貌なり。下大夫は賤し。孔子これと言ふに、和樂を用ゐ相接すに宜し。故に侃侃如たり」、「上大夫は卿なり。誾誾は中正貌なり。卿は貴し。敢へて和樂せずこれに接す。謹正以て相對すに宜し。故に誾誾如たり」とした。■邢昺は、「侃侃は和樂の貌。誾誾は中正の貌。下大夫稍しく卑し、故にこれと言ふに、以て和樂すべし。上大夫は卿なり、爵位既に尊し、故にこれと言ふに、常に中正を執り、敢へて和樂せず」とした。  
　君在（いま）せば、踧踖如（しゆくせきじよ）たり。與與如（よよじよ）たり。踧子六反。踖子亦反。與平聲。或如字。○君在視朝也。踧踖恭敬不寧之貌。與與威儀中適之貌。張子曰、與與、不忘向君也。亦通。○此一節、記孔子在朝廷、事上接下之不同也。踧cùは子zǐ六liùの反（音が合はない）。踖jíは子zǐ亦yìの反（音声が合はない）。與yúは平聲。或は字の如し。○君在せば、朝を視る。踧踖は、恭敬、寧んぜざる貌。與與は、威儀中（あたりて）適（かな）ふ貌。張子が曰く、與與は、君に向かふを忘れず。亦通ず。○此の一節、孔子、朝廷に在して、上（かみ）に事り下（しも）を接する同じからずを記す。  
■踧踖は魯公の権威と威儀を敬して、畏れおののくさまであるが、大仰でもこせこせでもなく、丁度よいくらいの所作であった。■何晏は、「馬融曰く、君在すときは朝を視る。踧踖は恭敬の貌。與與は、威儀中りて適ふ貌」を引いた。■皇侃は、「君在は君出でて朝を視る時を謂ふ。踧踖は恭敬貌なり。禮は毎日旦に諸臣列して路門外に在りて、以て君に朝す。君至りて日出でてこれを視る。これを視て則ち一一卿大夫に揖す。而して都て一士に揖す。當に此れ君朝に視る時。則ち臣は皆、恭敬を起す貌。故に孔子踧踖如たり。ー　踧踖須べしと雖も、又得て急速ならず。舉動毎に須ず與與如たりと形容する所以。與與は猶徐徐のごとし。恭しみて安ず所以なり」とした。■邢昺は、「君在は、朝を視る時を謂ふ。踧踖は恭敬之貌。與與は威儀中りて適ふ貌。既に當に君在の所、故に恭敬、威儀中りて適はしむ、敢へて解惰せず」とした。  
  
○　君召して擯（ひん）たらしむれば、色勃如（ぼつじよ）たり。足躩如（かくじよ）たり。擯必刃反。躩驅若反。○擯主國之君、所使出接賓者。勃變色貌。躩盤辟貌。皆敬君命故也。擯bìnは必bì刃rènの反（音が合はない）。躩juéは驅qū若rěの反（音声が合はない）。○擯は、主國の君、出でて賓に接せしむる所の者。勃は色（顔色）を變ずる貌。躩は盤辟の貌。皆君命を敬する故なり。  
■主は「擯」、客は「介」により意を通じる。客の身分により、擯も介も格と員数が変はる。擯は主の意を伝へるべく、顔色をひきしめる。躩は盤辟、盤辟とは轉速、盤旋進退とある。轉速はスピードで、速貌とあり素早い動作。躩は隹の足を想定しており、盤は平、旋は何度も往来するさま。平足で素早く主賓の間を往来することか。　■何晏は、「鄭玄曰く、君召して擯せしむるは、賓客有りてこれを迎へせしむ」、「孔安国曰く、必ず色を變ず」、「包氏曰く、足躩は盤辟の貌」を引いた。■皇侃は、「擯は君の為に賓を接すなり。賓有りて君に來るを謂ふ。己を召してこれを迎接せしむなり。ー　聘禮に云く、卿を上擯と為し、大夫を承擯と爲し、士を紹擯と爲す。是なり」、「既に己を召して賓を接す。故に己宜しく色を變じ敬を起こす。故に勃然なり」、「躩は盤辟の貌なり。既に召され敢へて自ら容さず。故に速行して足盤辟なり。故に江熙が云く、閑歩に暇（いとま）せず、躩は速貌なり。ー　盤辟は即ち足轉速なり」とした。■邢昺は、「此の一節は、君、孔子を召すを言ふ。擯を為しむる禮なり。擯は、謂主國の君、出して賓を接しむる者なり」、「勃然は色を變ずなり。足躩は盤辟の貌。既に君命を傳へ以て賓を接す。故に必ず色を變へ肅敬を加ふ。足容は盤辟、躩然は敢へて懈慢せず」とした。  
　與に立つ所を揖（ゆう）すれば、手を左右にす。衣の前後、襜如（せんじよ）たり。襜赤占反。○所與立、謂同爲擯者也。擯用命數之半。如上公九命、則用五人、以次傳命。揖左人、則左其手、揖右人、則右其手。襜整貌。襜chānは赤chì占zhānの反。○與に立つ所は、同じく擯爲る者を謂ふ。擯は命數の半を用ふ。上公九命の如きは、則ち五人を用ふ。次を以て命を傳ふ。左の人を揖すれば、則ち其の手を左にし、右の人を揖すれば、則ち其の手を右にす。襜は整ふる貌。  
■主、上擯～下擯⇔下介～上介、賓といふ伝達経路にあって、右から左、左から右へ伝達する際の所作。■何晏は、「鄭玄曰く、左の人を揖すれば、其の手を左にし、右の人を揖すれば、其の手を右にす。一（ある）ひは俛し一ひは仰ぐ。故に衣の前後襜如たり」を引いた。■皇侃は、「此れ君出でて賓を迎ふを謂ふ。己に君、副を爲し擯を列（つら）ぬ時なり。賓の副を命介と曰く。主人の副を擯副と曰く。且つ國に匹敵して作すを言ふ。公、公に詣る法のごとし。賓は主人の大門の外の西邊に至り北を向く。門を去ること九十歩にして下車す。面北を向きて倚す。賓は則ち九副にして賓の北に在して東に向く。邐迤（りだ：ななめに歩く）し西北す。四十五歩の中に在す。主人は門の東邊に出ず。南に向きて倚す。主人是公にして則ち五擯、主人是侯伯にして則ち四擯、主人是子男にして則ち三擯、命數に隨はず。主人謙る、故に竝び用ふこと強ひて半數なり。公、擯を陳（なら）ぶ。公の南に在りて西に向く。邐迤し東南す。亦四十五歩の中に在す。主人をして擯を下し賓と介を下し相對す。而して中間相去ること三丈六尺。賓主介擯列して既に竟へる。主人、上擯に語る。賓に辭を請ひ、來の意の所以を問はしむる。是に上擯以て下擯に至りて相傳ふ。下擯、前に進み賓の下介に揖す。而して語を傳へこれに問ふ。下介、問を傳ふ。而して次を以て上（かみ）賓に至る。賓、語に答ふ。上介をして以て次に傳へ而して下（しも）、下介に至る。下介亦進みて下擯に揖す。下擯傳へ而して上以て主人に至る。凡て相傳ふと雖も列位在り。言語を授受する時に當りて、皆、身を半轉し手を戻し相揖す。既に竝び立ちて相揖す。故に、揖す所と立を曰く。若し左人に揖せば其の手移りて左に向く。若し右人に揖せば其の手移りて右に向く。故に、其の手を左右にすと云ふ。既に身を半廻し手を左右に廻す。當に身上に著る衣をして、必ず襜襜如のごとくして容儀有り。故に、江熙が云く、兩手で揖せば、衣裳襜如にして動く」とした。■邢昺は、「擯に傳ふ時を謂ふ。案ずに諸侯自ら相賓と為す禮。凡そ賓主各副有り。賓副を介と曰く。主副を擯と曰ひ行人に及ぶ。諸侯自ら行くが若し。則ち介各其の命數に從ふ。主、國の大門の外に至る。主人及び擯門を出で相接す。若し主君が是れ公にして、則ち擯は五人、侯伯にして則ち擯は四人、子男にして則ち擯は二人。命數に隨はざる所以は、謙なり。故に並びて用ふこと強ひて半の數なり。賓若し是れ公ならば、來りて門外に至れば、直に闑（げつ、門の中央、両扉を留めるため打ち込まれた短い杭）に當りて西、門を去ること九十歩にして下車し、軹に當り北に郷（嚮：向）きて立つ。鄭注《考工記》云く、『軹は轂末（車軸の端）なり』。其れ侯伯は前侯胡下に當りて立つ、子男衡に當りて立つ。注：『衡は車の軛（くびき）を謂ふ』。其れ君軫（馬車の輿部の前の横木）に當りて、九介君の在す北に立ち、西北に邐迤す。東に郷きて並びて列す。主公出ず。直に闑の東、南西に郷きて立つ。擯は主人の南に在り、邐迤して東南に立ち、並びて西に郷く。末擯と末介とを相對せしむ。中間傍（近く）、相去ること三丈六尺。擯介列すこと既に竟（をは）れば、則ち主君就（ただち）に擯に求辭せしむ。求辭せしむ所以は、敢へて自許せず、人已に詣るを求め、他事の為に至るを恐る。故に就求辭は、自謙の道なり。求辭の法は、主人先づ求辭の言を傳へ上擯に與ふ、上擯以て次擯に至り、次擯繼傳して以て末擯に至る。末擯、賓の末介に傳與し、末介以て次に繼傳し、上（かみ）賓に至る。賓は其の來意の隨に答辭す。又上介に從ひて傳へ、下（しも）末介に至る。末介又末擯に傳與し、末擯傳ふこと相次ぎて上主人に至る。傳辭既に竟りて、而して後に進みて賓を迎へ門に至る。擯介朝位此の如きを知るは、《大行人職》文。又、傳辭、拜して賓を迎へ前に門に至るを知るは、《司儀職》の文。其の傳辭は、《司儀》の交擯なり。其の擯介を列すこと、辭の委曲（詳細）は、約《聘禮》の文。諸侯は卿大夫をして相聘せしめ、其の介と主位の若きは、則ち《大行人》に云ふ、『卿大夫の禮、各下其の君二等』鄭注に云ふ『介と朝位』是なり。主君これに待（応接）すこと、擯數は其の君に待す如し。其の異有るは、主君大門に至り限を出でず、南面して立つ。公の使は、亦、直に闑に西北に向き、七介、而して門を去ること七十歩。侯伯の使は、五介を列し、而して門を去ること五十歩。子男の使は、三介、而して門を去ること三十歩の若し。上擯閾（門の敷居）外に出で闑に東南し西を向く。介を陳ぶこと西北、東面して邐迤すること、君自ら相見ゆが如し。而して末介、末擯に相對し亦相去ること三丈六尺。擯介陳ぶこと竟りて、則ち傳命せず。而して上擯進みて末擯間に至り、南に賓に揖す。賓亦進みて末介間に至る。上擯と賓相去ること亦三丈六尺、而して上擯揖して事を請ふ。人、君に告ぐ。君は限内に在し、後に乃ち相與に入る。知るは、約《聘禮》の文。不傳辭は、《司儀》及び《聘禮》これを旅擯と謂ふ。君自ら來たる、必ず命を傳ふ所以は、《聘義》に云く、『君子、其の尊する所敢へて質せず、敬の至なり』。又、天子春夏に朝宗（「朝」「宗」「覲」「遇」は すべて「朝見」；中国周代の儀禮と王権、郭斉勇、武漢大学）を受くが若し、則ち迎法無し。享（供物）を受け則ちこれ有り。故に《大行人》に云く、『廟中、幣三享を將（すす）む』。鄭云く、『朝、享を先にす、朝と言はずは、朝は正禮、等（九十、七十、五十步の差等）有るを嫌はず』。秋冬の覲遇は、一は、これを廟に受くが若し、則ち亦迎法無し、故に《郊特牲》に云く、『覲禮は、天子堂を下りず諸侯に見ゆ』。冬遇、秋に依ること明かなり。擯の禮を以為に、依次して傳命す、故に左人に揖し其の手を左にし、右人に揖し其の手を右にす、一俯一仰し、衣前後せしめ襜如たり』とした。  
　趨（はし）り進むに、翼如（よくじよ）たり。疾趨而進、張拱端好、如鳥舒翼。疾く趨りて進むみ、拱を張り（両手を胸に合はせて）端好（よ）きこと、鳥の翼を舒（の；広げる）ぶるが如し。  
■門内の庭での動作、門に入る動作は次に記される。■何晏は、「孔安国曰く、端好（姿勢のよいこと）を言ふ」を引いた。■皇侃は、「擯賓を迎へ進みて庭に在りて行く時を謂ふ。翼如は端正を謂ふ。徐（おもむろ）に趨り衣裳は端正。鳥翔ばむとして翼を舒ぶ時の如し」とした。  
　賓（ひん）退けば、必ず復命して曰はく、賓顧みずと。紓君敬也。○此一節、記孔子爲君擯相之容。君の敬を紓（ゆる）ふす。○此の一節、孔子、君の爲に擯相する容を記す。  
■賓客の退去時の動作で、堂内での動作は以下に記される。■何晏は、「孔安国曰く、復命して君に白（まう）す、賓已に去ると」を引いた。■皇侃は、「君、己に賓を送しめき時を謂ふ。復命は反命なり。反命は初めて君命を受け以て賓を送すを謂ふ。賓退く。故に君命を反還す。以て君に白（まう）して賓已に去りぬと道（い）ふ。不顧と云ふは、舊に云く、主人若し禮にして送賓し、未だ足らずば則ち賓猶廻顧す。若し禮已に足りて送らば、則ち賓直に去りて復（また）廻顧せず。此れ明らかに則ち送賓の禮足れり。故に不顧と云ふ。ー　反りて君に白し賓已に去りぬと道ふを言ふ。然して賓已に去り亦是れ復來りて見顧せざるを云ふ」とした。■邢昺は、「《聘禮》を案ずに、聘享私覿を行ふ。禮畢りて賓出ず。公再拜して送る。賓復せず。鄭注に云く、公既に拜し、客趨りて辟る。君上擯に命じ賓を送して出ず。反りて告ぐ、賓、顧みずと。此に、君以て路に反り寢すべし」とした。  
  
○　公門に入るに、鞠躳如（きくきゆじよ）たり。容れられざるが如くす。鞠躳曲身也。公門高大而若不容、敬之至也。鞠躳は、身を曲（かが）むるなり。公門は高大、而して容れられざるが若くす、敬の至りなり。  
■君が在（ま）さずと雖も在すがごとくす。■何晏は、「孔安国曰く、身を斂（をさ）む（引き締める）」を引いた。■皇侃は、「公は君なり。孔子の君門に入る時を謂ふ。鞠は曲斂（腰をかがめ恐縮す）なり。躬は身なり。臣の君門に入る、自ら身を曲斂す。君門、大と雖も、而して己は恆に曲斂す。君門の狹くして容せられざるが如く為す」とした。■邢昺は、「此の一節は、孔子の趨朝の禮容を記す」、「公は君なり。鞠は曲斂なり。躬は身なり。君門は大と雖も、斂身は狹小にして其の身、容受されざるが如くす」とした。  
　立つに門に中せず、行くに閾（しきゐ）を履（ふ）まず。閾于逼反。○中門中於門也。謂當棖闑之閒、君出入處也。閾門限也。禮士大夫出入公門、由闑右不踐閾。謝氏曰、立中門、則當尊。行履閾、則不恪。閾yùは于yú逼bīの反（音と声が合はない）。○門に中すは、門に中するなり。棖闑（とうげつ）の閒に當るを謂ふ、君の出入する處なり。閾（よく、門の内と外とを区切る敷居）は門限なり。禮に、士大夫の公門を出入する、闑の右に由りす、閾を踐まずと。謝氏が曰く、立ちて門に中すは、則ち尊に當る。行きて閾を履むは、則ち恪（つつし）まず。  
■何晏は、「孔安国曰く、閾は門限なり」を引いた。　■皇侃は、「君門に在（ま）して倚りて立つ時を謂ふ。門に中すを棖（とう）闑（げつ）の中と謂ふ。門の中央に闑有り。闑は以て門を硋（と）め、兩扇の交はる處。門の左右の兩邊に各（おのおの）豎（じゅ、直立）す一木。これを名づけて棖と爲す。棖は以て車の過るを禦（ふせ）ぎ、門に觸れるを恐る。闌（らん、門遮）の東は是、君の行く道。闌の西は是、賓の行く道。而して臣は君道を行く。君に係屬するを示す。臣が門に倚りて立つ時が若きは、則ち得て君が行く所の棖闌の中央に當らず。中に當るは是不敬。故に門に中せずと云ふ」、「履は踐なり。閾は限なり。出入する時が若きは、則ち得て君の門限を踐まず。然る所以は、其の義二つ有り。一には則ち限を忽上升す（さっと越える）は自高矜（プライド）に似る。二には則ち人行きて限を跨（また）ぐ。己にこれを履むが若きは、則ち限を汚す。限を汚せば、則ち跨ぐ者の衣を汚すなり」とした。■邢昺は、「門に中すは棖闑の中央を謂ふ。君門の中央に闑有り、兩旁に棖有り。棖はこれ門梐（こまよけ：門前につくる木のさく）を謂ふ。棖闑の中、是れ尊者立つ所の處、故に人臣得てこれに當りて立たず」、「履は踐なり。閾は門限なり。出入に得て門限を踐履せず。爾（しか）所以は、一に則ち自の高、二に則ち不淨、並びに不敬と為す」とした。  
　位を過るに、色勃如（ぼつじよ）たり、足躩如（かくじよ）たり。其の言ふに、足らざる者に似たり。位君之虛位。謂門屛之閒。人君宁立之處、所謂宁也。君雖不在、過之必敬。不敢以虛位而慢之也。言似不足、不敢肆也。位は君の虛位（きょい、行事の際に君が礼を受ける所、普段は居ない）なり。門屛の閒を謂ふ。人君宁立（にんりつ、礼を受ける時のみ立つ）の處にて、所謂宁なり。君在らずと雖も、之を過ぐれば必ず敬す。敢へて虛位を以てして之を慢（おろそか）にせず。言ふこと、足らざるに似るは、敢へて肆（ほしいまま）にせざる。  
■何晏は、「包氏曰く、君の空位（君主の居ない所）を過るなり」を引いた。　　■皇侃は、「臣の朝君に入る時を謂ふ。位君は常に在す所の外の位なり。宁屏の閒に在りて、賓に揖す處を謂ふ。即ち君在さずと雖も此れ位。此の位尊ぶ可し。故に臣行きて入り、位の邊に從ひて過る。而して色勃然たり。足躩は敬を爲す。ー　前釋の如きなり」、「既に入りて位を過ぐ。漸（次第に）以て君に近づく。故に言語は細下し、得て多言せず。言ひて不足らざる狀の如し。足らず少く能はざるが若きなり」とした。■邢昺は、「位を過るは、君の空位を過るなり、門屏の間を謂ふ。人君の寧立の處。君、此の位に在さずと雖も、人臣これを之を過るに敬すべし、故に勃然として色を變へ、足盤辟して敬を為す」、「氣を下し怡聲足らざる者に似るが如し」とした。  
　齊（し）を攝（かか）げ堂に升るに、鞠躳如たり。氣を屛（をさ）めて息せざる者に似たり。齊音咨。○攝摳也。齊衣下縫也。禮將升堂、兩手摳衣。使去地尺。恐躡之而傾跌失容也。屛藏也。息鼻息出入者也。近至尊、氣容肅也。齊zīは音咨zī。○攝は摳（こう、持ち上げる）なり。齊は衣の下の縫（ほう、裳の裾を縫ひ合はせたもの）なり。禮に、將に堂に升らんとす、兩手に衣を摳（もちあ）げて、地を去ること尺ならしむ。之を躡（ふ）みて跌傾（つまづ）き容を失ふことを恐れてなり。屛は藏なり。息は、鼻息の出入する者なり。至尊に近づくに、氣の容を肅す（つつしむ）なり。  
■何晏は、「孔安国曰く、皆重く慎むなり。衣の下を齊と曰ふ。齊を攝ぐは、衣を摳げるなり」を引いた。　■皇侃は、「君堂に至るなり。攝は摳なり。齊裳は下縫ふなり。既に君堂に至る。これに升るに當りて、未だこれに升る前。而して摳げて裳前を提（さ）げる。齊下をして地に去ること一尺（地面から一尺持ち上げる）。故に齊を攝げて堂に升ると云ふ。堂に升りて將に君に近し。故に又自ら斂（をさ）むこと鞠躬如たり。必ず齊を攝ぐは、履（ふ）みて行くこと輟（とど）むを妨ぐが故なり」、「屏は疊除（じょうじょ）の貌。息は亦氣なり。已に君前に至る。當に疊除は其の氣を藏すごとし。氣息無き者に似るが如し。得て君に炰（炰烋＝咆哮、ほうかう）せず。ー　曲禮に云く。兩手で衣を摳げて齊去ること尺。是なり」とした。　■邢昺は、「皆重慎なり。衣下を齊と曰ふ。齊を攝ぐは、衣を摳ぐなり。將に堂に升る時、兩手を以て裳前に當て、裳を提挈し（持ち上げ）て起たしむ。衣長くして轉足（ころんで）してこれを躡履す（ふんづける）を恐る。仍りて復其の身を曲斂し、以て君所に至る。則ち其の氣を屏藏し、氣息無き者に似る」とした。  
　出でて一等を降（くだ）れば、顏色を逞（はな）って、怡怡如（いいじよ）たり。階を沒（つく）して趨れば、進むこと翼如（よくじよ）たり。其の位に復（かへ）れば、踧踖如（しゆくせきじよ）たり。陸氏曰、趨下本無進字。俗本有之誤也。○等階之級也。逞放也。漸遠所尊、舒氣解顏。怡怡和悦也。沒階下盡階也。趨走就位也。復位踧踖、敬之餘也。○此一節、記孔子在朝之容。陸氏（陸九淵、1139～1192、南宋儒学者、字は子静、号は象山）が曰く、趨の下、本、進の字無し。俗本にこれ有り、誤りなり。○等は階の級なり。逞は放なり。漸く所尊に遠ざかれば、氣を舒（の）べ顏を解く。怡怡は和悦なり。階を沒すは、階を下り盡くすなり。趨は、走りて位に就くなり。位に復りて踧踖たり。敬の餘なり。○此の一節は、孔子朝に在る容を記す。  
■何晏は、「孔安国曰く、先づ氣を屏め、階を下り氣を舒（の）ぶ。故に怡怡如たり」、「孔安国曰く、沒は盡なり。階を下り盡す」、「孔安国曰く、來る時過る所の位なり」を引いた。　　■皇侃は、「降は下なり。逞（解く、緩める）は申（伸「のびやか」）なり。出でて一等降る。君に見（まみ）ゆこと已に竟（をは）りて堂を下るを謂ふ。階第一級に至る時なり。初めて君に對す時既に氣を屏（をさ）めり。故に出でて一等を降りて氣を申（のば）す。氣申ぶは則ち顏色亦申ぶ。故に顏容は怡悦（いゑつ）なり」、「沒は盡の猶（ごと）し。盡階は諸級を下り盡して平地に至る時を謂ふ。既に君を去ること遠し。故に又徐（おもむろ）に趨りて翼如たり」、「位は謂初めて入る時、君の空位を過る所なり。今出でて此の位に至る。而して更に踧踖して敬となす」とした。■邢昺は、「以て先時氣を屏め、出でて階一級に下り則ち氣を舒ぶ、故に其の顏色を解き、怡怡然として和說す」、「沒は盡なり。下りて階を盡す、則ち疾く趨りて出で、拱（両手を胸の前に合はせる）を張りて端好し、鳥の翼を舒ぶが如し」、「復其の來時に過る所の位に至る。則ち又踧踖し恭敬す」とした。○注「閾は門限」。○正義曰く、《釋官》に云く、「枎これを閾と謂ふ」。孫炎が云く、「閾は門限なり」。經傳の諸注に、皆閾を以て門限と為す、內外の限約と為すと。○注「衣下を齊と曰ふ。攝齊は摳衣なり」。○正義曰く、《曲禮》に云く、「兩手で衣を摳ぐこと、齊を去ること尺」。鄭注に云く、「齊は裳下の緝を謂ふ」。然らば則ち衣は裳を謂ふ。對文則ち上を衣と曰ひ、下を裳と曰ふ。散則可通。故に此れ摳衣と云ふ。摳は提挈（ていけつ、持ち上げること）なり、裳前を提挈すを謂ひ、地を去らしむこと一尺なり」とある。  
  
○　圭を執れる、鞠躳如たり。勝（た）へざるが如し。上（あぐ）ること揖するが如く、下（くだ）すことは授（さず）くるが如し、勃如として戰色す。足蹜蹜（しゆくしゆく）として循（したが）ふこと有るが如し。勝平聲。蹜色六反。○圭諸侯命圭。聘問鄰國、則使大夫執以通信。如不勝、執主器、執輕如不克。敬謹之至也。上如揖、下如授、謂執圭平衡、手與心齊、高不過揖、卑不過授也。戰色戰而色懼也。蹜蹜擧足促狹也。如有循記所謂擧前曳踵、言行不離地、如緣物也。勝shēngは平聲。蹜sùは色sè六liùの反。○圭は諸侯の圭命なり。鄰國に聘問するは、則ち大夫執りて以て信を通ぜしむ。勝えざるが如しは、主の器を執るは、輕きを執るも克へれずが如くす。敬謹の至りなり。上ること揖するが如し、下すこと授くるが如し。圭を執ること衡に平（ひとしく）す、手と心（むね）とを齊（ひとしく）す。高くして揖するに過ぎず。卑くして授くるに過ぎざるを謂ふなり。戰色、戰して色懼るなり。蹜蹜は、足を擧ぐこと促狹なる。循ふこと有るが如しは、記に謂ふ所の前を擧げて踵を曳く。言ふは、行くに地を離れず、物に緣（より）たるが如し。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 玉圭 震旦文教基金會藏 | **玉圭** ([HP](http://www.npm.gov.tw/exhbition/jad9910/191.htm))     震旦文教基金會藏  西漢早中期  約西元前 206年　至前87年) | 「長樂未央」璧   金華堂藏 | **長樂未央**([HP](http://www.npm.gov.tw/exhbition/jad9910/198.htm)) **璧**       金華堂藏  東漢  西元 25年　至 200年 ） |

■圭は土と土からなり盛り土、平成の世では地鎮祭でみられるものだが、元来は土地の神、圭はその象徴。天子は天を祭り、諸侯にその地を封じ、諸侯は土地の神、社を祭る。璧は良渚文化（BC3500-BC2200頃）に遡り、日月を象った神権の象徴とされたようだが、中原では殷代に復活し、周代には最上の祭祀器に用ゐられるのみならす、穀の模様のあるものを子爵、蒲の模様のあるものを男爵の爵位にも用ゐた。圭や璧に加工される玉は献上品として珍重された。■何晏は、「包氏曰く、君の為に使して、鄰國に聘問するときは、君の圭を執持して鞠躬するは、敬慎の至り」、「鄭玄曰く、上（あげ）て揖するが如きは、玉を授るには宜く敬すべし。下（くだ）すに授るが如くすとは、敢へて禮を忘れず。戰色は敬なり。是の蹜蹜循ふこと有るが如しは、前を舉げて踵（くびす）を曳（ひ）きて行く」を引いた。■皇侃は、「君の爲に出でて鄰國に聘問せしめらる時を謂ふ。圭は瑞玉なり。周禮五等に諸侯各（おのおの）王者の玉を受く。以て瑞信と爲す。公の桓圭は九寸。侯の信圭は七寸。伯の躬圭は七寸。子の穀璧は五寸。男の蒲璧は五寸。五等自ら執りて王に朝すが若し。則ち各其の寸數の如し。其の臣出でて鄰國に聘せしむ若きは、乃ち各其の君の玉を執る。而して其の君の一寸を減ず。今圭を執ると云ふ。魯は是れ侯。侯は信圭を執る。則ち孔子執る所。君の信圭を執る。初め國に在り他國に及び至る。圭を執るは皆敬愼と爲す。圭は輕きのみと雖もこれを執れば、恆に圭重きが如くす。己、勝（た）ふ能はざるに似る。故に身を曲ぐること勝へざるが如きなり」、「初めて圭を授受する容儀を謂ふ。上て揖す如くすとは、就（つまり）下して玉を取り、上て人に授與する時を謂ふ。身を俯すは敬を為す。故に揖す時の如し」、「通して執行及び授時の顏色を謂ふ。戰鬪に臨陣せば、則ち色必ず懼怖す。故に今君の玉に重（かさ）ぬ。己の顏色をして恆に戰時の如くす」、「玉を舉げて行く時の容を謂ふ。蹜蹜は猶蹴蹴のごとし。循は猶緣循のごとし。玉を舉げて行く時を言ふ。敢へて廣歩速進せず。恆に足前に蹴る所有り、緣循する所有るが如し。ー　蹜蹜として循ふこと有る事を解するに、足前を舉げて恆に地に至らしめず。而して踵は或は地を離れずして、車輪の如し」とした。■邢昺は、「此の一節は、君の為に、鄰國に聘問せしめる禮容を記すなり」、「言ふは、君の圭を執持して、以て鄰國に聘す。而して鞠躬如として舉ぐること勝ふ能はざる。慎の至りなり」、「上るは玉を授くる時、宜しく敬すべきを謂ふ。故に揖すが如し。下るは既に玉を授かりて降り、玉を執らずと雖も、猶授くる時の如くすべし、敢へて禮を忘れずを謂ふ」、「亦圭を執りて聘を行ふ時戰栗し、其の顏色敬すを謂ふ。足則ち前を舉げ踵を曳きて行く、蹜蹜如として循ふ所有り」とした。  
　享禮（きようれい）には、容色有り。享獻也。旣聘而享、用圭璧、有庭實。有容色和也。儀禮曰、發氣滿容。享は獻なり（献物、皮馬、錦繍、産物）。旣に聘して享するに、圭璧を用ゐ、庭實（庭に陳列する）有り。容色有りは、和なり。儀禮に曰く、氣を發して容に滿つ。  
■何晏は、「鄭氏曰く、享は獻なり。聘禮既に聘して、享圭璧を用ゐて庭實有り」を引いた。■皇侃は、「享は聘後の禮なり。夫れ諸侯の天子に朝す。五等に及ぶ更に相朝すは聘禮。初め至りて皆先づ單に玉を執りて禮を行ふ。王に禮すこれを為朝（君臣の礼）と謂ふ。臣をして主國の君に禮せしむ、これを為聘と謂ふ。聘問（友好の礼）なり。政言久しく相見（まみ）えず臣をして安否に來問せしむ。既に是れ初めて至る。其の禮敬を質とす。故に他物無し。唯瑞玉有り。至誠を表はすのみ。朝聘行ひて既に竟（を）はる。次に享禮を行ふ。享は獻物なり。亦各玉有り。玉は聘玉と同じからず。又皆物有りてこれを將（すす）む。或は皮馬を用ふ。或は錦繡を用ふ。又土地に生る所（産物）を獻ず。滿庭に羅列す。これを庭實と謂ふ。其の中の差異。復曲論せず。但に既に是れ次後の行禮。多を以て貴と為す。則ち質敬の事は猶稍（やや）輕し。故に容貌に采章有り。裼（上着を脱ぐ）に及び以て行事とす。故に容色有りと云ふ。　ー　亦圭璧有り。執る所聘時と同じからず」とした。■邢昺は、「享は獻なり。聘禮既に聘す、而して享圭璧を用ゐ庭實有り。聘時圭を執り命を致す。故に勃如戰色す。享を行ふ時に至る、則ち稍許(緊張をほぐす)して容色有りて、復戰栗せず」とした。  
　私覿（してき）には、愉愉如たり。私覿以私禮見也。愉愉則又和矣。○此一節、記孔子爲君聘於鄰國之禮也。晁氏曰、孔子定公九年仕魯、至十三年適齊。其閒絶無朝聘往來之事。疑使擯執圭兩條、但孔子嘗言其禮當如此爾。私覿は、私の禮を以て見ゆるなり。愉愉は、則ち又和なり。○此の一節、孔子、君が爲に鄰國に聘する禮を記す。晁氏が曰く、孔子定公が九年、魯に仕へ、十三年に至りて齊に適く。其の閒絶えて朝聘往來の事無し。疑ふらくは擯せしめて圭を執るの兩條、但に、孔子嘗て其の禮を言ひて、當に此の如くすのみ。  
■何晏は、「鄭玄曰く、覿は見（まみゆ）なり。既に享して、乃ち私禮を以て見ゆ。愉愉顏色和らぐ」を引いた。■皇侃は、「私は公に非ず。覿は見なり。愉愉は顏色和（なご）むなり。聘享を行ふを謂ふ。公禮已に竟（を）はる。別日に、臣をして私齎己物（私的な献上品）以て主君に見（まみ）ゆ。故に私覿を爲（す）と謂ふ。既に私見は公に非ず。故に容儀轉じて以て自若す（落ち着く）。故に顏色容貌に和悦の色有り。復勃戰の容は無し。　ー　私禮は束帛乘馬の屬（たぐひ）を謂ふ」とした。■邢昺は、「覿は見なり。愉愉は顏色和むなり。謂ふは、既に享、乃ち私禮を以て見ゆ。故に顏色愉愉然として和說なり。○注「包曰」から「之至」に至る。○正義曰く、「君の為に使して、鄰國に聘問し、君の圭を執り持つ」とは、案づるに、《聘禮》に云ふ『賓は圭を襲（かさ）ねて執り、公側に命を致し、中堂と東楹の間に玉を襲ねて受く』、是れ其の事なり。凡て玉を執る禮、《大宗伯》に云く、『公は桓圭を執る』。注に云く、『雙植これを桓と謂ふ。桓は宮室の象、其の上に安んず所以。圭長は九寸』。故に、《玉人》に云く、『命圭は九寸、公これを守る』是れなり。《宗伯》に又、云く、『侯は信圭を執り、伯は躬圭を執る』。注に云く、『蓋し皆、人の形を琢飾し以て象（かたど）る（型どり磨き装飾する）。文（あや）に粗縟（粗略と縟細）有るのみ。其の慎行以て保身を欲す。圭は皆長七寸』。故に《玉人》に云く、『命圭は七寸、これを信圭と謂ひ、侯これを守る。命圭は七寸、これを躬圭と謂ひ、伯これを守る』。江南の儒者解して云く、『直は信と為し、其の文は縟細（細密）。曲は躬と為し、其の文は粗略』。義或ひは然り。《宗伯》に又、云く、『子は穀璧を執り、男は蒲璧を執る』。注に云く、『穀は人を養ふ所以。蒲は席と為す。人を安んず所以。圭を執らずんば、未だ國を成さず』。蓋し琢は穀稼及び蒲葦の文を為す。蓋し皆徑五寸。故に、《大行人》に云く、「子は穀璧を執り、男は蒲璧を執り五寸」。是なり。凡て圭は廣三寸、厚は半寸、上の左右各（おのおの）剡（けず）ること寸半。知るは、《聘禮記》の文。其の璧則ち内に孔有り、外に肉有り。其の孔これを好と謂ふ。故に、《爾雅・釋器》に云く、『肉が好に倍す、これを璧と謂ふ、好が肉に倍す、これを瑗（えん、大きな穴の開いた壁）と謂ふ、肉と好とが一の若きを環と謂ふ』。此れ謂ふは、諸侯の執る所の圭璧、皆王に朝す及び相朝して用ふ所、故に、《典瑞》前に既に玉を陳ぶ則ち云く、『王に朝・覲・宗・遇・會・同す、諸侯相見ゆ亦この如し』、是なり。其れ公、侯、伯は朝後に、皆璋を用ふ。知るは、《聘禮》を以て、君に聘すに圭を用ひ、夫人に聘すに璋を以てす。則ち天子に及びて後に亦然るを知る。其の子、男既に王に朝し璧を用ゐ、朝して後に宜しく琮を用ゐ、璧を以てす、琮は相對すが故なり。鄭注《小行人》に云く、『其の上公及び二王の後、天子に享すに圭は馬を以てし、享後の璋は皮を以てす。其の侯、伯、子、男、天子に享すに璧は帛を以てし、享後の琮は錦を以てす。其の玉の大小は、各其の命數の如くす』。知るは、《玉人》に云く、『璧琮は九寸、諸侯以て天子に享す』是なり。其の諸侯相朝す、執る所の玉は天子に朝すと同じ。其の享玉は皆璧を以て君に享す、琮を以て夫人に享す。相朝す禮は亦當然明らかなり。子、男相享すは、則ち降し琥（こ、虎形の玉）を用ふに繡（しゅう、刺繍）を以てし、璜（こう、弓形の玉）に黼（ほ、白黒の斧模様）を以てす。故に鄭注《小行人》に云く、『其れ諸侯に亦璧琮を用ふのみ。子、男は諸侯に則ち享すに琥璜を用ふ。其の瑞を下す』是なり。其れ諸侯の臣が天子に聘す及び諸侯に聘す、其の聘玉及び享玉は、其の君の瑞一等を降す。故に《玉人》に云く、『彖圭璋は八寸、璧琮は八寸、以て覜聘す（諸侯聘問相見の礼）』是なり。○注「足蹜蹜如有循とは、前を舉げて踵を曳きて行く」。○正義曰く、按づに《玉藻》に云く、『龜玉を執りて、前を舉げ踵を曳く、蹜蹜如なり』。踵は足の後跟（かかと）を謂ふ。謂ふは、行く時に、初め足を前に舉げ後に足跟を曳きて行く、地を離れざること、蹜蹜如なり。足を舉ぐこと狹數を言ふ、蹜々如なり。《玉藻》に又云く、『圈豚行きて、足を舉げず、齊して流るが如し』。 鄭注に云く、『圈は轉なり。豚の言、循ふ所有るが若し。足を舉げず踵を曳く、則ち衣の齊（そろ）ふこと水の流の如し。孔子、圭を執りて則ち然り。此れ徐趨なり』。○「 鄭曰」より「庭實」に至り注す。○正義曰く、『享は獻なり』、《釋詁》の文なり。云く、『聘禮既に聘し、而して享は圭璧を用ゐ庭實有り』とは、案づに、《覲禮》侯氏既に王に見ゆ、乃ち云く、『四享は皆束帛を璧に加ふ（十反の絹布の上に璧を置く、最高級の礼物）、庭實は唯國に有る所。鄭玄云く、【四當に三と為す】』。《大行人職》に曰く、『諸侯の廟中幣を將む、皆三享が其の禮』。差又無く四に取るなり。初享、或は馬を用てす、或は虎豹の皮を用てす。其の次享、三牲魚臘。籩豆の實、龜なり、金なり。丹漆絲纊竹箭なり。其の餘常の貨無し。此の物一國に能く有す所に非ずんば、唯國に有る所、分けて三享と為す、皆璧帛を以てこれを致す。《禮器》に云く、『其の王大きに饗す事や、三牲魚臘は、四海九州の美味なり。籩豆之薦は、四時の和氣なり。內金は和を示すなり。束帛加璧は、德を尊ぶなり。龜を前列と為すは、先知なり。金これに次ぐは、情を見（あら）はすなり。丹漆絲纊竹箭は、眾と財を共にすなり。其餘無常貨は、各（おのおの）其の國の有す所を以てす、則ち遠物を致すなり。《郊特牲》に曰く、『旅幣方無し、土地の宜別にする所以、而して遠邇の期を節すなり。龜は前列と為し、先知なり。鍾以てこれに次ぐ、以て和居しこれに參る。虎豹の皮は、服猛を示す。束帛加璧は、往德なり』。鄭玄《覲禮》の注に言ふ所、彼に出ず。諸侯が相朝聘す、其の禮も亦然り。《聘禮》を案づに、『賓は裼（せき、上着を脱ぎ）し束帛に璧を加へ奉りて享す』。《記》に曰く、『凡そ庭實は隨入して、左し先ず、皮馬相間すは可なり』。《小行人職》に云く、『六幣を合す、圭は馬を以てす、璋は皮を以てす、璧は帛を以てす、琮は錦を以て、琥は繡を以てす、璜は黼を以てす。此の六物は、以て諸侯の好を和すが故』。鄭注に云く、『合は同なり。六幣は、享す所以なり。五等の諸侯が天子に享すは璧を用ふ。享後は琮を用ふ。其の大各其の瑞の如し。皆庭實有り。馬を以て皮の若くす。皮は虎豹の皮なり。圭璋を用ふは、二王の後なり。二王の後尊し、故に享に圭璋を用ふ而してこれを特とす。《禮器》に曰く、【圭璋特】是なり。其れ諸侯に亦璧琮を用ふのみ。子、男の諸侯に則ち享すに琥璜を用ふ。下其の瑞なり。凡そ二王の後、諸侯が相享す玉は、大小各其の瑞一等を降す。卿大夫が覜聘をして亦かくの如きに及ぶ』。是れ圭璧を用ひ庭實有るなり。○「既享，乃以私禮見」に注す。○正義曰く、《聘禮》に案ずに、『擯は出でて事を請ひ、賓は事畢るを告げ、賓は束錦を奉り以て覿を請ふ』。注に云く、『覿は見なり。卿は公事を將む。是れ其の歡敬を交はさむとす。羔を用ひず、使に因りて見ゆ、特に來るに非ず』。是なり」とした。  
  
○　君子は紺緅（かんすう）を以て飾（もとほし）せず。紺古暗反。緅側由反。○君子謂孔子。紺深靑揚赤色、齊服也。緅絳色。三年之喪、以飾練服也。飾領緣也。紺gànは古gǔ暗ànの反。緅zōuは側zè由yóuの反（声が合はない）。○君子は孔子を謂ふ。紺は深靑揚赤の色（赤を含む青色）、齊服なり。緅は絳色（赤茶色）。三年の喪に、以て練服（白絹服）を飾る。飾は領緣（えりのふちどり）なり。  
■何晏は、「孔安国曰く、一入を緅と曰ふ。飾（せず）とは、以て領袖（えりそで）の緣（ふちどり）を為さず。紺は、齊服の盛色、以て衣を飾るを為すこと、齊服を衣（き）るに似たり。緅は、三年の練（ぬりぎぬ）に緅を以て衣に飾す。其の喪服を衣るに似たる為に、故に皆以て衣に飾を為さず」を引いた。■皇侃は、「君子は士より以上に有り。士以上には衣服に法有り。雜色すべからず。紺緅は孔意を言ふ。紺は是れ玄色なり。緅は是れ淺絳色なり。飾は衣の領袖緣なり。紺緅を用ゐざる所以は、衣の領袖に緣を爲すは、玄是れ齋服、若し紺を用ひ衣に飾を爲す、是れ衣は齋服に似る。故に、用ゐず。又三年の喪、練に淺絳を受け緣と爲す。若し緅を用ひ衣に飾を爲せば、是れ衣は喪服に似たり。故に敢へて用ゐず。故に君子不以紺緅飾也と云ふ。―　然り案ずに、孔、紺を以て齋服の盛色と為す。或は紺玄に深きを言ふべし。齋服に似るが為に、故に、用ゐず。而して禮家三年練。縓（げん；浅紅色）を以て深衣の領に緅と爲す。緅を用ふを云はず。且つ考工記を檢ふに、三入を纁（そひ；茜を三度染める）と爲し、五入を緅（しゅう）と爲し、七入を緇（し）と爲す。則ち緅は復（また）淺絳明に非ず。故に解者相ひ承けて皆云ふ、孔(安国)の此の注「一入を緅と曰ふ」は誤なり。■邢昺は、「此の一節、孔子の衣服の禮を記す。君子は孔子を謂ふ。紺は玄色。緅は淺絳色。飾とは領の緣なり。紺とは、齊服の盛色、以て衣に飾し、衣は齊服に似たり。緅とは、三年練、緅を以て衣に飾し、其れ衣は喪服に似たりと為す、故に皆以て飾せず」とした。

|  |  |
| --- | --- |
| http://www5e.biglobe.ne.jp/~syotenti/img/2003obiage.jpg | ■茜を煮出した液で染色し、乾燥させて寝かせる、この工程を何度も繰り返して茜染めが誕生します。・・・・完成した茜染めの上にロッグウッド（[アカミノキ](http://www.geocities.jp/kbg_tree/0_plants_name/jaketu-haemato/campeki.html)）をかけたのでした。ロッグウッドは、染めると青っぽい紫に、鉄媒染すると単調な黒になります。しかし、初 めに灰汁媒染をして染めた楊梅（ヤマモモ）と茜が下地にあるので、三色の絵の具を混ぜるような効果を生み出して、奥行きのある豊かな黒が誕生しました。茜染め染色家/田中ゆきひと（[HP](http://www5e.biglobe.ne.jp/~syotenti/akane.htm)）■青色素として梔子(くちなし)、黃色素として槐([えんじゅ](http://www.hana300.com/enju00.html)) を用いる染色の場合は、（天然色素による染色の簡便化「[HP](http://www.shc.usp.ac.jp/doumyou/img/sub/graduation_research/2010_001.pdf)」）を参照。 |

　紅紫は以て褻（け）の服に爲（つく）らず。紅紫閒色不正。且近於婦人女子之服也。褻服私居服也。言此則不以爲朝祭之服可知。紅紫は、閒色、正しからず。且つ婦人女子の服に近し。褻の服は私居の服なり。此を言ふは、則ち以て朝祭の服を爲らざること知る可し。  
■何晏は、「王（弼）曰く、褻服は私居す、公會の服に非ず。皆正しからず、褻尚（なを）衣（き）ず。正服施す所無し」を引いた。■皇侃は、「紅紫は正色に非ず。褻服は私褻の服。正衣に非ず。褻尚衣ず。則ち正服に、故に宜（むべ；当然）用ゐず。此を言ふ所以は、時に多く紅紫を重ね正色を棄つことを為す。故に孔子、これを衣ず。故に、後卷に紫の朱を奪ふを惡（にく）むと云ふ。―　鄭玄、注して云く、紺緅は紫玄の類なり、紅纁の類なり。玄緇の祭服と爲す所以。其の類に等し。紺緅の木染は、衣に飾すべからず。紅紫の草染は、褻に服すべからざるのみ。飾は純緣を謂ふ。侃案ずに、五方は正色。青赤白黒黄。五方は閒色。綠は青の閒（色）。紅は赤の閒。碧は白の閒。紫は黒の閒。緇は黄の閒なり。故に紅紫を用ゐず。言ふは、是れ閒色なり。閒と爲す所以は、頴子嚴しく云く。東方は木。木色は青。木は土に剋つ。土色は黄。青に以て黄を加ふ、故に綠と爲る。綠は東方の閒を爲す。又南方は火。火色は赤。火は金に剋つ。金色は白。赤に以て白を加ふ、故に紅と爲る。紅は南方の閒を爲す。又西方は金。金色は白。金は木に剋つ。木色は青。白に以て青を加ふ、故に碧と爲る。碧は西方の閒を爲す。又北方は水。水は色黒。水は火に剋つ。火色は赤。黒に以て赤を加ふ、故に紫と爲る。紫は北方の閒を爲す。又中央は土。土色は黄。土は水に剋つ。水色は黒。黄を以て黒を加ふ、故に緇黄と爲る。緇黄は中央の閒を爲す。緇黄は黄黒の色なり。又一注に云く、東の甲乙は木（甲は木兄、乙は木妹）。南の丙丁は火（丙は火兄、丁は火妹）。中央の戊已は土（戌は土兄、己は土妹）。西の庚辛は金（庚は金兄、辛は金妹）。北の壬癸は水（壬は水兄、癸は水妹）。以て木は土に剋つ。戊は妹已を以て木甲に嫁す。是黄は青に入る。故に綠と爲る。又火は金に剋つ。庚は妹辛を以て丙に嫁す。是白は赤に入る。故に紅と爲る。又金は木に剋つ。甲は妹乙を以て庚に嫁る。是青白に入る。故に碧と爲る。又水は火に剋つ。丙は妹丁を以て壬に嫁す。是赤黒に入る。故に紫と爲る。又土は水に剋つ。壬は妹癸を以て戊に嫁す。是黒黄に入る。故に緇黄と爲る者なり」とした。■邢昺は、「紅は南方の間色。紫は北方の間色。褻服は私居服、公會の服に非ず。其の紅紫の二色を以て皆不正、故に、以て褻服と為さず。褻服は尚用ゐず、則ち正服は施す所無きこと知るべし。但に紅紫を言ふは、則ち五方の間色皆用ゐず」とした。  
　暑に當りては袗（ひとへ）の絺綌（ちげき）、必ず表（うはおひ）にして之を出す。袗單也。葛之精者曰絺、麤者曰綌。表而出之、謂先著裏衣、表絺綌而出之於外。欲其不見體也。詩所謂蒙彼縐絺、是也。袗は單なり。葛（葛布）の精（くはし）き者を絺と曰ひ、麤（あら）き者を綌と曰ふ。表にして之を出すとは、先ず裏衣を著て、絺綌を表にして之を外に出すを謂ふ。其の體を見（あらは）さざらんことを欲す。詩（詩經．鄘風．君子偕老）に謂ふ所の彼の縐絺（しゅうち；精細な葛布）を蒙る、是れなり。  
■何晏は、「孔安国曰く、暑は則ち單服す。絺綌は葛なり。必ず表にして出すは、上衣を加ふ」を引いた。■皇侃は、「暑は熱なり。縝は單なり。絺細は練葛なり。綌大は練葛なり。表は上衣を加ふを謂ふ。古人は冬には則ち衣裘。夏には則ち衣葛なり。若し在家ならば則ち裘葛の上。亦別に衣を加ふこと無し。若し出でて行き賓に接すは皆上衣を加ふ。暑に當りて熱しと雖も絺綌單すべし。若し出ずは單すべからず。則ち必ず上衣を加ふ。故に云く、必ず表にして出ず。然して裘出ずも亦必ず衣を加ふ。而して獨り云く、暑に當りて絺綌は、暑熱を嫌ひて加へず。故に特にこれを明らかにす。然して又衣裏の裘は、必ず上衣の色の隨（まま）にす。衣と裘とをして相稱（そろ）はしむ。則ち葛之を衣と爲す。亦未だ必ずしも上服の色の隨にせず。■邢昺は、「袗は單なり。絺綌は葛なり。精を絺と曰ふ。粗を綌と曰ふ。暑は則ち單服。必ず表衣を加尚し、然る後にこれを出す、其の形褻を為す故なり」とした。  
　緇衣（しい）には羔裘（こうきゆう）、素衣（そい）には麑裘（げいきゆう）、黄衣には狐裘。麑研奚反。○緇黑色。羔裘用黑羊皮。麑鹿子、色白。狐色黄。衣以裼裘、欲其相稱。麑níは研yán奚xīの反（音・声が合はない）。○緇は黑色。羔裘は黑羊の皮を用ふ。麑は鹿の子、色白。狐は色黄。衣は以て裘に裼（せき）すは、其の相稱（そろ）ふことを欲す。  
■何晏は、「孔安国曰く、服皆中外の色相稱ふ」を引いた。■皇侃は、「裘色は既に衣に隨ふ。故に此に仍りて明らかに裘上の衣なり。緇染黑は七入ものなり。玄は則ち六入色なり。羔は烏羊なり。裘と上衣とは相稱ふ。則ち緇衣の内。故に羔裘と曰く。緇衣服は玄冠十五升緇布衣素積裳なり。素積は素を用ひて之に襞（ひだ）を為す。積攝はこれ無數。故に素積と云ふ。此是諸侯、視朝服と日く。諸侯視朝と群臣とは同服。孔子は是魯臣。故に亦服は此の服、以て朝君と日ふ」、「素衣は衣裳竝び素を用ふを謂ふ。麑は鹿の子なり。鹿子の色は白に近し。素と微に相稱ふ。國に凶荒有るを謂ふ。君が素服ならば則ち群臣これに從ふ。故に孔子は魯臣。亦これに服す。喪服は則ち大鹿を裘と為る。故に檀弓に云く、鹿裘は横（よこ広く）長（たけ長く）敺（う）つ。是なり。此れ凶荒の服既に輕し。故に裘は鹿子を用ふ。鹿子の文は大鹿に勝る。或に云く、大蜡祭（そさい）は百物の神。皮弁素服（死に装束）なり。故に鄭玄、郊特牲に注して云く、皮弁素服にして祭り送るを以て終る。注して云く、素服衣裳は皆素なり」、「此の服は蜡祭、宗廟、五祀を謂ふ。歲終りて大蜡功に報ふ。物を象る色黄落つ。故に、黄衣黄冠を著る。而して狐貉亦黄。故に特に裘と爲す以て相稱ふ。孔子、臣と爲し蜡祭を助く。亦君に隨ひて著る黄衣なり。故に禮運に云く。昔に仲尼蜡賓に預る。是なり。鄭玄、郊特牲に注して云く。黄衣黄冠して祭る。注に云く、祭は既に蜡臘先祖五祀と謂ふなり。又云く、論語に云く、黄衣に狐裘。案ずに鄭は論語を以て黄衣是れ郊特牲、蜡臘祭廟服なり」とした。■邢昺は、「凡そ祭服は、先づ明衣を加へ、次に中衣を加へ、冬には則ち次に袍繭（ほうけん；綿入れ「纊（新しい真綿）爲繭、縕（古い真綿）爲袍」）を加へ、夏には則ち袍繭せず、葛を用ひ、次に祭服を加ふ。朝服の若きは、布衣亦は先づ明衣を以て親身し、次に中衣を加へ、冬には則ち次に裘を加へ、裘の上に裼衣（袖なし上着）を加へ、裼衣の上に朝服を加ふ。夏には則ち中衣の上に裘を用ひず葛を加へ、葛の上に朝服を加ふ。凡そ服すに必ず中外の色相稱（そろ）ふべし。羔裘は黑羊裘なり。故に緇衣を用ひ以てこれに裼（そろは）す。麑裘は鹿子の皮を以て裘と為す、故に素衣を用ひ以てこれに裼す。狐裘は黃、故に黃衣を用ひ以てこれに裼す」とした。  
　褻（せつ）の裘は長し、右の袂（たもと）を短くす。長欲其溫。短右袂、所以便作事。長は、其れ溫かきことを欲す。右の袂を短くするは、事を作すに便なる所以。  
■何晏は、「私家の裘長きは、溫を主とす。右の袂を短くするは、作事に便す」を引いた。■皇侃は、「褻裘は家中で常に著る裘を謂ふ。上に加ふ衣無し。故に衣と云はず。家居は溫暖を主とす。故に長を衣と為す。而して右臂是事と用有り。故に短を右袂に為す。作事をして便す。袂は衣袖の身に屬す者を謂ふ。手閒に屬す袂の若きは則ち袪と名づく。亦袖と曰ふ」とした。■邢昺は、「此の裘は私家に著る裘なり。これを長すは、溫を主とす。袂は是裘の袖、右の袂を短くすは、作事の便なり」とした。  
　必ず寢衣有り、長（たけ）一身有半。長去聲。○齊主於敬。不可解衣而寢。又不可著明衣而寢。故別有寢衣。其半蓋以覆足。程子曰、此錯簡。當在齊必有明衣布之下。愚謂如此則此條與明衣變食旣得以類相從。而褻裘狐貉、亦得以類相從矣。長chàngは去聲。○齊は敬を主とす。衣を解きて寢（い）ぬ可からず。又明衣を著（き）て寢ぬ可からず。故に別（こと）に寢衣有り。其の半は蓋し以て足を覆ふ。程子の曰く、此れは錯簡なり。當に「齊必有明衣布」の下に在るべし。愚謂へらく、此の如き則ち此の條と明衣・變食とは旣に類を以て相從ふを得て、而して褻の裘・狐貉も、亦類を以て相從ふことを得。  
■何晏は、「孔安国曰く、今の被（ひ；全体を覆ふもの）なり」を引いた。■皇侃は、「寢衣を被と謂ふ。長きに宜し。故に、長一身有半なり」とした。■邢昺も、「今の被なり」とした。  
　狐貉の厚き以て居り、狐貉毛深溫厚。私居取其適體。狐貉は、毛深くして溫厚。私居る其れ體に適ふに取る。  
■何晏は、「鄭玄曰く、家に在りて以て賓客に接す」を引いた。■皇侃は、「此れ家に在りて賓客に接す裘を謂ふ。家に居すは溫を主とす。故に厚これを為す。既に賓客に接す、則ち其の上に亦應（まさ）に衣有り。ー　然して前（さき）の褻裘亦應に是狐貉の厚きなり」とした。■邢昺も、「此れ家に在りて賓客に接す裘を謂ふ。家に居すは溫を主とす。故に厚これを為す」を引いた。  
　喪を去（のぞ）いて佩（おび）ざる所無し。去上聲。○君子無故、玉不去身。觽礪之屬、亦皆佩也。去qǔは上聲。○君子故無れば、玉身を去らず。觽礪（けいれい；錐、砥石）の屬（たぐひ）も、亦皆佩びるなり。  
■何晏は、「孔安国曰く、去は除なり。喪に非ずんば則ち備（そな）へ佩びるべしは佩るべし」を引いた。■皇侃は、「去喪は三年の喪畢（をは）りて喪服已に除くを謂ふ。無所不佩は佩びること己に今は吉を謂ふ。得て佩びるべきものは悉く佩るべきなり。嫌ふに既に喪親を經へ、恐るらく、除服後に猶異有るべし。故に特にこれを明らかにす。ー　備へ佩びるべしは佩びるが若し、大夫をして玄冕を為す。公侯の袞（袞衣。袞冕）の屬及び佩玉佩の飾なり」とした。■邢昺も、「去は除なり。喪に居しては飾無し。故に佩びず。喪除けば、則ち備へ佩びるべしは佩びるべし」とした。  
　帷裳（いしょう）に非ざれば必ず之を殺（さい）す。殺去聲。○朝祭之服、裳用正幅如帷。要有襞積、而旁無殺縫。其餘若深衣、要半下、齊倍要。則無襞積而有殺縫矣。殺shàiは去聲。○朝祭の服は、裳に正幅を用ゐて帷（とばり；垂れ幕）の如くす。要（こし）に襞積（へきせき）有り、而して旁（かたがた）に殺縫（縫ひ合はせること）無し。其の餘の深衣の若きは、要は下に半ばし、齊は要に倍す。則ち襞積無くして殺縫有り。

|  |  |
| --- | --- |
| http://www.hanfumap.com/w/images/a/a0/Weichang.jpg | ■何晏は、「王（弼）曰く、衣は必ず殺縫有り。唯帷裳は殺すこと無し」を引いた。■皇侃は、「帷裳は帷幔（いまん）の屬を謂ふ。殺はこれを縫（ぬ）ふを謂ふ。帷幔裳に非ざる若きは則ち必ずこれを縫殺す。殺縫の面を以て裏に置く。不殺の面は外に在り。而して帷裳は但にこれを刺し連ねる。今の服の如く帊裏に有らず殺縫の異外にす。然る所以は、帷幔内外竝びて人に見られる所と爲り、必ず飾るべし。故にこれを刺し連ねるのみ。喪服とする所以を云ふ。凡そ裳の内は幅を削ぐ。裳の外は幅を削がず。鄭注に云く、削は猶殺な |

るべし。而して鄭注此れ云く、帷裳は朝祭の服を謂ふ。其れ正幅を制し帷の如し。非ずんば餘衣を謂ふ。これを殺すは其の幅を削ぐ。縫しめ齋は腰に陪すものなり」とした。■邢昺は、「殺は殺縫を謂ふ。凡そ衣は必ず殺縫有り、唯帷裳には無し」とした。  
　羔裘玄冠しては以て弔せず。喪主素、吉主玄。弔必變服、所以哀死。喪には素（しろ）きを主し、吉には玄（くろ）きを主とす。弔すれば必ず服を變ず、死を哀しむ所以。  
■何晏は、「孔安国曰く、喪は素を主とす。吉は玄を主とす。吉凶服を異にす。故に、相弔ひせず」を引いた。　　■皇侃は、「弔は弔喪なり。喪凶は素を主とす。故に羔玄は弔に用ゐず」とした。■邢昺は、「凶は素を主とす。吉は玄を主とす。故に羔裘玄冠は以て吊喪せず」とした。  
　吉月には必ず朝服して朝す。吉月月朔也。孔子在魯致仕時如此。○此一節、記孔子衣服之制。蘇氏曰、此孔子遺書、雜記曲禮。非特孔子事也。吉月は月朔なり。孔子魯に在りて致仕の時此の如し。○此の一節は、孔子の衣服の制を記す。蘇氏が曰く、此れ孔子の遺書、曲禮を雜記す。特に孔子の事に非ず。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 2012年3月23日爵弁服和皮弁服 - zhaox606 - 枝巢而居，乘桴於海 | 「朝服 中国」の画像検索結果 | 左図 带你了解汉服（四）——衣裳之玄端　（[HP](https://sanwen8.cn/p/1d3xKyu.html)） [曲阜汉服推广中心](https://sanwen8.cn/author/qfhanfu.html)   右図 古代の服装（春秋戦国～漢代（前漢）まで（[HP](http://blogs.yahoo.co.jp/lee_senchan/24479335.html)） 「敦煌壁画唐人作古代朝服垂綬図」 　春先の心境（古代朝服・冠の２ＤＣＧ） |

■何晏は、「孔安国曰く、吉月は月朔なり。朝服は皮弁の服」を引いた。■皇侃は、「吉月は月朔なり。朝服は凡そ朝服と言ふは、唯是れ玄冠・緇布・衣素・積裳。今此れ朝服と云ふは、皮弁十五升・白布・衣素・積裳を謂ふ。亦朝服を為すと謂ふ所以は、天子之を用ゐ以て日朝に視（みそなは）す。今云ふ朝服は是れ天子に從ひて名を受く。諸侯之を用ゐ以て朝に視す。孔子は魯臣。亦得て君と同服す。故に月朔は必ずこれを服す。然るに魯は文公より朔に視さず。故に子貢、告朔の**餼**羊を去らむと欲す。而して孔子、是れ哀公の臣。應（まさ）に君に隨ひて視朝の事無かるべし。而れども必ずこれを服すと云ふは、當に是れ君、朔に視さずと雖も、孔子は月朔に必ず服し以て朝す。是れ我其の禮を愛すなり。ー　皮弁は鹿皮を以て弁と爲す。弁の形は今の祭酒道士が扶容冠の如し。而して邊葉無し。身に十五升白布衣素積裳を著る。而して頭に皮弁を著る。天子の皮弁服、内には則ち素錦衣と狐白裘を著る。諸侯の皮弁服、内に狐黄裘と黄錦衣を著る。卿大夫は得て衣錦せずして皮弁服、内に當に麛（べい；鹿の子）裘と青豻（かん；野犬）を著るべし。以てこれに裼（そろは）す」とした。■邢昺は、「吉月は、月朔なり。朝服は皮弁服。言ふは、毎朔日に必ず皮弁の服を服し以て君に朝す」とした。  
  
○　齊（ものいみ）すれば必ず明衣有り。布をす。齊側皆反。○齊必沐浴。浴竟卽著明衣。所以明潔其禮也。以布爲之。此下脱前章、寢衣一簡。齊zhāiは側cè（zè、zhāi）皆jiēの反（音が合はない）。○齊すれば必ず沐浴す。浴し竟（をは）れば卽ち明衣を著る。其の禮を明潔にする所以なり。布を以て之を爲す。此の下に前章の寢衣の一簡を脱す。  
■何晏は、「孔安国曰く、布を以て沐浴為す衣」を引いた。■皇侃は、「齋浴時に著る所の衣を謂ふ。浴竟りて身未だ燥（かわ）かず。未だ好衣を著（き）るに堪（た）へず。又、肉を露（あらは）にすべからず。故に布を用ゐ衣と為すこと衫（さん；肌着）の如くして長身（丈が長い）なり。之を著て以て身燥くを待つ。故に玉藻に云く。「君、布を衣（き）て身を晞（かは）かす」。是なり。ー　然り浴時乃ち布を用ふ、便ち肉燥くを待つ。江長云く、沐は是れ沐浴時に當る。亦、此の服を衣るに衣上に置きて以て身の溼（しつ；湿）を辟（さ）くなり」とした。　■邢昺は、「將に祭して齊すれば、必ず沐浴す。浴竟りて明衣を著るは、其の體を明絜にする所以なり。明衣は布を以て之とす。故に『齊必有明衣布』と曰ふ」とした。また、「孔曰」より「飾衣」に至り注した。古注では、ここまでを区切りとしたが、朱熹はそれを変更した。「一入曰緅。飾者、不以為領袖緣也」を云ふは、案ずに《考工記》に云く、「三入を纁（そひ）と為し、五入を緅（しゅ）と為し、七入を緇（し）と為す」。注に云く、「纁に染むは三入して成る。又再染し黑を以て則ち緅と為す。緅、今の禮俗文に爵に作る、爵頭色（雀の頭の意味で「濃い赤褐色」）の如きを言ふ。又復（またまた）再染し黑を以てし乃ち緇と成る。鄭司農（鄭衆、ていしゅう、字仲師、後漢初期経学家　? - 83年）說くに以て《論語》に曰く『君子不以紺緅飾』、又曰く『緇衣羔裘』。《爾雅》に曰く、『一染之を縓（げん；浅紅）と謂ふ、再染之を竀（せい；浅紅）と謂ふ、三染之を纁と謂ふ』。《詩》に云く、『緇衣、これ宜し』。玄此の同色を謂ふのみ。布帛を染むは、染人これを掌る。凡そ玄色は、緅緇の間に在り。其は六入なるものか」。今孔氏の云ふ「一入曰緅」は、未だ何書に出ずるかを知らず。又「緅は、三年の練は緅を以て衣を飾す」と云ふは、則ち緅を讀みて縓と為すに似る。案ずに《檀弓》に云く、「練、練衣は黃裏にして縓で緣る」。注に云く、「小祥は、練冠と練中衣、黃を以て內と為し、縓を飾と為す。黃の色纁より卑し、縓纁の類は明らかに外除す」。故に曰く「其を為せば衣喪服に似る、故に皆以て飾衣を為さず」。「紺は、齊服の盛色以て飾衣を為すは、衣齊服に似る」と云ふは、《說文》に云く、「紺は、帛の深青に赤色を揚ぐ」。是れ紺を青赤色と為す。故に齊服盛色と為す。若し以て領袖に緣飾を為せば、則ち衣齊服に似る。○「服皆中外之色相稱也」を注す。○正義曰く、中衣と外裘とは其の色皆相稱（そろ）ふを謂ふ。此の經に云ふ「緇衣、羔裘」は、朝服を謂ふ。知は、，案ずに《玉藻》に云く、「諸侯は朝服し以て內朝に於て日視朝す（毎朝の朝務を行ふ）」。《士冠禮》に云く、「主人は玄冠朝服、緇帶素韠（ひつ；礼装用の膝掛け）」す。注に云く、「玄冠は委貌。朝服は十五升布衣。而して素裳、色を言はずは、衣と冠とは同色」。是れ朝衣の色は玄、玄即ち緇色の小別。此れ孔子の服を說きて、云く「緇衣、羔裘」、《玉藻》に亦、云く「羔裘と緇衣とは以てこれを裼（せき）す（色を合はす）」、是れ羔裘は緇衣を裼用す。明らかに其の上の正服は亦緇色なり。下文に又曰く、「羔裘玄冠は以て吊せず（裏地をしない）」、是れ羔裘は玄冠に配し用ふ所。羔裘の上必ず緇布衣を用ひ裼す。裼衣（袖なし上着）の上の正服は亦是れ緇色。文と玄冠とは相配す。故に、緇衣羔裘、是れ諸侯君臣の日視朝の服なりを知る。其の素衣麑（鹿の子）裘は、則ち在國視朔（月始め）の服なり。卿大夫士亦皆然り。故に、鄭玄注して此を云く、「素衣麑裘は視朔の服」是なり。其れ外國聘享を受く、亦素衣麛（べい；鹿の子）裘。故に《聘禮》に云く、「裼降立」。注に引く《玉藻》に云く、「麛裘青犴（かん：野犬）褎（しゅう；袖）、絞（こう；黄青系統の色）衣以てこれに裼す（幼鹿の裘と青の野犬の袖には黄青の袖無し上着）」。又引きて此云く、「素衣、麛裘。皮弁時或は素衣」。鄭（玄）此言ふ如し、則ち裼衣は或は絞、或は素、定らず。熊氏云く、「臣は絞を用ひ、君は素を用ふ」。皇氏云く、「素衣を正と為す、記者言を亂し絞のみ」。其れ「黃衣、狐裘」は、大蠟息民の祭服を謂ふ。人君は歲事を以て成熟し、群神を搜索して報じてこれを祭すを、これ大蠟と謂ふ。又臘祭先祖五祀は、令に因り民大飲を得、農事は休息す、これを息民と謂ふ。大蠟の後に、息民の祭を作し、其の時則ち黃衣狐裘有り。大蠟之祭と息民とは異る。息民には黃衣狐裘を用ひ、大蠟則ち皮弁素服、二者は同じからず。其の大蠟の後を以て、始めて息民の祭を作（な）す。息民と大蠟は同月、其の事相次ぐ、故にこれを連ねて言ふのみ。知るは、《郊特牲》に云く、「蠟なるは索なり。歲の十二月、萬物を合聚（肉野菜穀物を一つ鍋で煮る料理）してこれを索饗（神祖先に請い求め饗）す。皮弁素服して祭る。素服以て送終す。葛帶（くずの白帯）榛杖（はしばみの杖；いづれも陰気）、喪殺（深く喪に服す）なり」是れ大蠟の祭用の素服なり。《郊特牲》既に蠟祭を說きて、其の下に又云く、「黃衣黃冠して祭るは、息田夫なり」。注に云く、「祭は既に蠟を謂ふ。臘は先祖五祀なり。是に勞農以てこれを休息す」。是れ息民の祭用の黃衣なり。此れ孔子の服を說きて、「黃衣、狐裘」と云く。《玉藻》に云く、「狐裘黃衣以これに裼す」、此れを以て大蠟息民則ち黃衣狐裘有るを知る。是れ此の三者の服は、中衣と外裘とは其の色皆相ひ稱（そろ）ふなり。○「 孔曰」より「佩也」に至り注す。○義曰く、「喪に非ずば則ち備へ佩びること宜しきを佩る」云ふは、案ずに《玉藻》に云く、「 古の君子必ず玉を佩る。右に徵角（ソとミの音程の玉）、左に宮羽（ドとラの音程の玉）。凡そ帶には必ず佩玉（はいぎょく）有り、唯喪には則ち否。佩玉には衝牙有り。君子故無くば、玉身を去らず。君子は玉に德を比す。天子は白玉を佩びて玄の組綬（くみひも）、世子は瑜（ゆ；美・徳）玉を佩びて綦（き；あやぎぬ色）の組綬、士は需玟（みん；玉に似た美石）を佩びて縕（うん；赤黃色）の組綬。孔子は象環五寸を佩びて綦の組綬」。是れ居喪に非ずば則ち佩此の宜しきを備へて佩る。○注「王（粛）曰く、衣必ず殺縫有り、唯帷裳のみ殺無し」。○正義曰く、朝祭の服を謂ふ。上衣必ず殺縫有り。下の裳に在るは、其の制正しい幅は帷の如し。名づけて帷裳と曰ふ。則ち殺縫無し。其の餘の服の裳、則ち亦殺縫有り。故に深衣の制、半下を縫ふ要在（べきもの）、齊しく縫ひ倍を要す。喪服の制、裳內は幅を削る。注に云く、「削は猶殺なり」。○「孔(安国)曰く、喪は素を主とす。吉は玄を主とす。吉凶服を異にす」を注す。○正義曰く、《檀弓》に云く、「奠は素器を以てす。生は哀素の心有るを以てす」。注：「哀素は、哀痛して飾ること無きを言ふ。凡そ物飾ること無きを素と曰ふ」。又禮祭の服皆玄の衣服。是れ喪は素を主とす。吉は玄を主とす。○「 孔曰」より「弁服」に至るを注す。○正義曰く、「吉月は、月朔なり」と云ふは、《詩》に云ふ「二月初吉」、《周禮》に云ふ「正月の吉」を以てす。皆朔日を謂ふ。故に、此の吉月は朔日を謂ふを知る。「朝服は皮弁服」を云ふは、《士冠禮》に云く、「皮弁は、服は素緇帶と素韠（ひつ；前垂れ）を積む（着ける）」。注に云く、「此れ君と朔の服を視る。皮弁は、白の鹿皮を以て冠と為す、象は上古なり。積は猶辟なり。素を以て常と為す。辟蹙其の要中（腰周りを襞にする）。皮弁の衣布を用ふ。亦十五升、其の色象（アイボリー）」。魯は文公より視朔の禮を行はず、孔子其の禮を廢すを恐る。故に月朔に每し、必ず此の視朔の服を衣て君に朝す、所謂我其の禮を愛すなり。  
　齊すれば必ず食を變ず。居れば必ず坐を遷す。變食謂不飮酒、不茹葷。遷坐、易常處也。○此一節記孔子謹齊之事。楊氏曰、齊所以交神。故致潔變常以盡敬。食を變ずは、酒を飮まず、葷（くん；臭いの強い野菜）を茹（くら）はずを謂ふ。坐を遷す、常の處を易へる。○此の一節は、孔子の齊を謹む事を記す。楊氏が曰く、齊は神に交はる所以。故に潔を致し常を變じ以て敬を盡くす。  
■何晏は、「孔安国曰く、常の饌を改む」、孔安国曰く、「常の處を易へる」を引いた。■皇侃は、「神に應接するに方（あた）り自ら潔淨せむとす。故に其の常の食を變へる」、「亦恆に居る坐に坐さず。故に祭前に先ず散して路に寢門外に齊すこと七日。又致りて路に寢中に齊すこと三日なり。故に范寧云く、齊は敬潔を以て主と爲す。以て神明之享を期す。故に常の食を改め、居を齊室に遷す」とした。　■邢昺は、「此の一節齊祭の飲食・居處の事を論ずなり」、「鬼神に接し事つるらむとし、自ら絜淨せむを謂ふ。故に其の常の饌を改む」、「常の處を改易を謂ふ」とした。  
  
○　食(いひ)は精（しらけ）を厭（いと）はず、膾（なます）は細きを厭はず。食音嗣。○食飯也。精鑿也。牛羊與魚之腥、聶而切之爲膾。食精則能養人。膾麤則能害人。不厭言以是爲善。非謂必欲如是也。食sìは音嗣。○食は飯なり。精は鑿（さく；精米のこと）なり。牛羊と魚との腥（しょう；生肉）は、聶（ひう；削ぐ）して之を切りて膾にす。食精ければ則ち能く人を養ふ。膾麤（あら）ければ則ち能く人を害す。厭はず、言ふは、是を以て善しとす。必ずしも是の如きこと欲（おも）ふを謂ふに非ず。  
■皇侃は、「此れ兼ねて平常の禮を明らかにす。食若し麤ければ、則ち人の生を誤ちて疾（や）む。故に、調和すに精潔すを厭はず」、「魚及び肉を細く切る。皆膾と曰ふ。既に腥之を食ふ。故に細き者を厭はず」とした。■邢昺は、「食は飯なり。牛と羊と魚の腥は、これを聶（そ）ぎて切りて膾にす。飯と膾とは精細を尚ぶ所なり」とした。  
　食の饐（い）して餲（あい）せる、魚の餒（あざ）れて肉（しし）の敗（やぶ）れたるを食（くら）はず。色惡しきを食はず、臭（か）の惡しきを食はず、飪（じん）を失へる食はず、時ならざる食はず。食饐之食音嗣。饐於冀反。餲烏邁反。飪而甚反。○饐飯傷熱濕也。餲味變也。魚爛曰餒、肉腐曰敗。色惡臭惡、未敗而色臭變也。飪、烹調生熟之節也。不時、五穀不成、果實未熟之類。此數者、皆足以傷人。故不食。食饐の食sìは音嗣。饐yìは於yú冀jìの反。餲àiは烏wū邁màiの反。飪rènは而ér甚shènの反。○饐は、飯は熱濕（湿）に傷（そこな）ふなり。餲は味の變ずるなり。魚（うを）爛（らん）すること餒と曰ふ、肉の腐（ふ）たるに敗（はい）と曰ふ。色の惡（を）、臭惡（しうを）、未だ敗れずして色臭（しきしう）變ずなり。飪は、烹調（ほうちょう；調理）生熟の節（善き煮焼き加減）なり。時ならずは、五穀成らず、果實未だ熟せざるの類。此の數のもの、皆以て人を傷（そこな）ふに足る。故に食はず。  
■何晏は、「孔安国曰く、饐餲は臭、味の變ずるなり」、「魚敗れるを餒と曰ふ」、「孔安国曰く、飪を失ふ、生熟の節を失ふ」、「鄭玄曰く、時ならざるは、朝夕日中の時に非ず」を引いた。■皇侃は、「饐は、飲食の經久して腐臰（臭）すを謂ふ。餲は、經久して味惡しを謂ふ。乾魚、乾肉久しくして味惡きが如し。爾雅に云く、食饐してこれを餲と謂ふ。李充注して云く、皆飲食壞敗の名なり。―　饐は臰變ずなり。餲は味變ずなり」、「餒は魚の臰壞を謂ふ。魚敗れて餒餒然なり」、「肉の臰壞す。爾雅に云く。肉はこれを敗と謂ふ。魚はこれを餒と謂ふ。李巡云く、肉の敗れること久しふして則ち臰（にほ）ふ。魚餒れて肉爛れる」、「食饐而餲より以下竝びて食ふべからず」、「色惡不食は、食常の色を失ふ。是が為に色惡し。色惡くして則ち食ふべからず」、「臰惡は饌臰を謂ひ食すに宜しからず。故に食はず」、「失飪は生熟節を失ふを謂ふ。煮食或は未熟。或は已に過熟。竝びて食はず」、「時ならずは朝夕日中時に非ず。其の時に非ずんば則ち食すに宜しからず。故に食さず。江熙云く、時ならずは生にして其の時に非ずを謂ふ。冬の梅李の實の若し」とした。　■邢昺は、「饐餲は、臭味變ずなり。魚敗れるを餒と曰ふ。飯の氣味變じ、及び魚肉敗壞すを言ふ、皆これ食はず」、「謂ふは、飯食及び肉の顏色香臭變じて惡しきものは、皆これを食はず」、「饌、生熟の節を失ふを謂ふ」、「朝夕日中の時に非ずを謂ふ」とした。  
　割（きりめ）正しからずんば食はず。其の醬（しょう）を得ずんば食はず。割肉不方正者不食。造次不離於正也。漢陸續之母、切肉未嘗不方。斷葱以寸爲度。蓋其質美、與此暗合也。食肉用醬、各有所宜。不得則不食、惡其不備也。此二者、無害於人。但不以嗜味而苟食耳。肉を割くこと方正ならざるは食はず。造次も正を離れず。漢の陸續の母、肉を切ること未だ嘗て方ならざるは、葱（ねぎ）を斷（き）るに寸を以て度と爲す。蓋し其の質美、此と暗に合（あ）へり。肉を食ふに醬を用ふは、各々宜しき所有り。得ずんば則ち食はずは、其の備はざるを惡みてなり。此の二つの者、人に害無し。但に味を嗜むを以て苟も食はざるのみ。  
■何晏は、「馬融曰く、魚の膾は芥醬に非ずんば食はず。」　■皇侃は、「古人肉を割くこと必ず方正す。若し方正ならずんばこれを割かず。故に食はず。江熙云く、殺すに道を以てせずば不正となす」、「食の味は各（おのおの）宜しき所有り。蠃醢（らかい）菰食（こし）魚膾（ぎょかい）芥醬（かいしょう）竝びて相ひ宜し（礼記、[内則](http://www2.mmc.atomi.ac.jp/web01/Flower%20Information%20by%20Vps/Flower%20Albumn/literary%20works/China_classic/raiki_daisoku.htm#gyushu)）。故に若し食すに宜しき所の醬を得ずんば則ち食はず。―　古は醬齊𦵔の三者は通名す。芥醬は即ち芥齊なり」とした。■邢昺は、「折解牲體を謂ふ、脊（せき）脅（きょう）臂（ひ）臑（じゅ）の屬。禮に正數有り。若し解割其の正を得ずんば、則ち食はず」、「謂ふは、魚膾、芥醬を得ること非ずんば則ち食はず」とした。  
　肉多しと雖も、食の氣に勝たしめず。惟酒は量無かれども、亂に及ばず。食音嗣。量去聲。○食以穀爲主。故不使肉勝食氣。酒以爲人合歡。故不爲量。但以醉爲節、而不及亂耳。程子曰、不及亂者、非惟不使亂志、雖血氣亦不可使亂。但浹洽而已可也。食sìは音嗣。量liàngは去聲。○食は穀を以て主とす。故に肉を食の氣に勝たしめず。酒は以て人の爲に歡を合はす。故に量を爲さず。但し醉を以て節と爲し、亂に及ばざるのみ。程子の曰く、亂に及ばずとは、惟志を亂れしめざるに非ず、血氣と雖も亦亂れしむ可からず。但に浹洽（しょうこう；全体にリラックスし心がうちとける）のみ可なり。  
■皇侃は、「勝は猶多なり。食は他饌を謂ふ。食氣多く肉少きは則ち肉美（うま）し。若し肉多く他食少きは則ち肉美からず。故に肉食氣に勝たしめず。亦、殺に因りて多殺を止む」、「酒多しと雖も有限の量無し。而して人宜しく己が隨（まま）に能く飲む。醉亂に及び至ること得ず。一に云く、人量を為すに格（いた）らず。而して人能くする所の隨にして亂莫し」とした。　■邢昺は、「氣は小食なり。言ふは、肉有りて多しと雖も、之を食ひて食氣に過らしめるべからず」、「唯人飲酒に有限の量無し。但し多くを得ずして、以て困亂に至る」とした。  
　沽（か）ふ酒市（か）ふ脯（ほし）、食はず。沽市皆買也。恐不精潔、或傷人也。與不嘗康子之藥同意。沽、市は皆買なり。精潔ならず、或は人を傷ふことを恐る。康子が藥を嘗めざると意を同じふす。  
■皇侃は、「酒は自ら作らず則ち未だ必ず清淨ならず。脯（干し肉）は自ら作らず則ち何物の肉かを知らず。故に沽市得る所。竝びに食はざる所なり。或ひと問ひて曰く、沽酒飲まず。則ち詩に、我に沽ふ酒無しとは那云へるか。答へて曰く、論ず所明らかなるは是れ祭神用ひざる。詩の明らかにする所、是れ人得て用ふなり」とした。　■邢昺は、「沽は賣なり。酒は自ら作らず。未だ必ず精絜ならず。脯は自ら作らず。何物の肉かを知らず。故に食はず。酒當に飲と言ふべし、而して亦食はずと云ふは、脯に因りて並びてこれを言ふのみ。經傳の文、此の類多し。《易・係辭》に云く、『これを潤すに風雨を潤之以風雨てす』，《左傳》に曰く、『馬牛は皆百匹』、《玉藻》に云く、『大夫は得て車馬を造らず』、皆一に從ひて文を省く」とした。  
　薑（はじかみ）を撤（す）てず食ふ。薑通神明、去穢惡。故不撤。薑は神明に通じ、穢惡を去る。故に撤てず。  
■何晏は、「孔安国曰く、撤は去なり。齊は薰物を禁ず。薑は辛くして臭はず。故に去らず」を引いた。■皇侃は、「撤は除なり。齊は薫物を禁ず。薑は辛くして薫ぜず。嫌亦これを禁ず。故に明らかに食時に薑を除ず」とした。　■邢昺も、「撤は去なり。齊は薰物を禁ず。薑は辛くして臭はず。故に去らず」、公安国を踏襲した。  
　多く食はず。適可而止、無貪心也。可に適ふを而して止む。貪心無し。  
■何晏は、「孔安国曰く、過飽せず」を引いた。　■皇侃は、「多（さは）なれば則ち傷廉（しょうれん；潔き德を損なひやぶる）す。故に多ならず。ー江熙云く、啖す（むさぼり食ふ）所少き」とした。　■邢昺は、「過飽すべからず。此れより已上、皆齊文に蒙る。凡ての言、食はずは、皆人に不利を為す。亦齊は，孔子慎しむ所。齊は必ず嚴敬。若し必ずこれを食はば、或は困病に致る。則ち嚴敬心を失ふ。故に食はず。其れ凡て常にして必ず然らず」とした。  
　公に祭れば肉を宿（よべ）にせず。祭り肉は三日を出ださず。三日を出づれば、之を食はず。助祭於公、所得胙肉、歸卽頒賜、不俟經宿者、不留神惠也。家之祭肉、則不過三日、皆以分賜。蓋過三日、則肉必敗、而人不食之。是褻鬼神之餘也。但比君所賜胙、可少緩耳。祭を公に助けて得る所の胙肉（そにく）、歸りて卽ち頒け賜ふ。宿を經ることを俟たざるは、神の惠を留めざる。家の祭肉、則ち三日を過ぎず、皆以て分けて賜ふ。蓋し三日を過ぐれば、則ち肉は必ず敗れて、人之を食はず。是れ鬼神の餘を褻（おろそかに）すなり。但君の賜ふ所の胙に比すれば、少しく緩（ゆる）ける可きのみ。  
■何晏は、「周生烈曰く、祭を君に助けて、得る所の牲體。歸りて則ち班け賜ひ、神惠を留めず」、「鄭玄曰く、其の家よりの祭肉は、三日過ぎれば食はず。是鬼神の餘を褻す」を引いた。■皇侃は、「公に祭すは、孔子仕（つか）へまつる時に君の祭を助くを謂ふ。祭を助けば必ず賜俎を得。賜俎得れば還へりて即ち分賦してこれを食ふ。留め置きて宿を經ること得ず。經宿是れ鬼神の餘を慢にす。ー　牲體は隨臣の貴賤以て牲骨體これを俎賜と為すを謂ふ。祭統に云く、貴者は貴骨を得。賤者は賤骨を得。是なり」、「家の自祭を謂ふ。自祭肉多し。故に經宿を許す。但に出ずこと三日を得ず。三日を出ずれば是れ鬼神の餘を褻慢す。故に人亦後にこ食ふを得ず」とした。■邢昺は、「祭を君に助くを謂ふ。得る所の牲體は、歸りて則ち班し賜ひ、神惠を留め經宿せず」、「其の家よりの祭肉を謂ふ、三日を過ぐれば食はず。是鬼神の餘を褻慢す」とした。■鬼神の餘とは、我が国の「お下がり」のことであらう。鬼神に召し上がっていただいたもの、それを「おろそか」にすることを不敬とした。「周代の人々の観念によると、祖廟とは、祖先が子孫を監督し、百官を取り締まり、それらの者の道徳を発揚させて邪悪を防ぐ場所である。そのため、「礼」により制限され固定された制度に基づいて祭祀を行うのが当然であり、それに反することは、礼に違背した大きな不敬に当たる。・・・春秋時代になって牧畜業が発展すると、「少牢」および「太牢」という2種類区別ができた。豚、羊、牛の中では牛が重んじられ、天子の祭祀では必ず牛を供物とするか、牛、豚、羊を一緒に捧げ、それを最も贅沢な供物として「太牢」と呼んだ。卿や大夫は、地位が天子より低く、能力も限られているため、祭祀で豚や羊のみを使い、それを「少牢」と呼んだ。・・・古代中国の祭祀は、霊魂不死の観念を前提としている。古代には、人の死後にも霊魂が存在すると考え、身体を離脱した霊魂を「鬼」と呼んだ。祖先が家庭や集団を離れても、祖先の霊魂は、常に人の世を行き来し、子孫を見守っていく。必要があれば、生前の姿で現われたり、夢に出てきたりして、子孫に警告を与える。この霊魂不死という考え方は、かつての中国では広く認められていた。死んだ人の霊魂は、なおも仇敵に報復したり、恩人に恩返ししたりする能力を持ち、その姿や声は生前と同じとされた（[中国古代の祭祀](http://www.okinoshima-heritage.jp/files/ReportDetail_45_file.pdf)）」。  
　食ふに語らず。寢ぬるに言はず。答述曰語、自言曰言。范氏曰、聖人存心不他。當食而食、當寢而寢。言語非其時也。楊氏曰、肺爲氣主、而聲出焉。寢食、則氣窒而不通。語言、恐傷之也。亦通。答述を語と曰ふ。自言を言と曰ふ。范氏が曰く、聖人、心を存すること他ならず。食に當りて食ひ、寢に當りて寢す。言語は其の時に非ず。楊氏、曰く、肺は氣の主爲り、而して聲出づ。寢食すれば、則ち氣窒（ふさがり）て通ぜず。語言すれば、恐るらくは之を傷ふ。亦通ず。  
■皇侃は、「言は是宜しく己を出すべし。語は是答述なり。食は益を加ふべし。故に許言して許語せず。語は則ち口惜しむべし。亦不敬なり。寢は是眠臥。眠臥は靜にすべし。若し言へば則ち人に驚閙（きょうとう；驚かせ騒がしい）す。故に言はず」とした。■邢昺は、「直言を言と曰ひ、答述を語と曰ふ。方に食ふに語るべからず。語れば則ち口中憎むべし（みっともない）。寢息は宜しく靜すべし。故に言はず」とした。  
　疏食（そし）菜羹（さいこう）と雖も瓜（とれ）祭れば、必ず齊如たり。食音嗣。陸氏曰、魯論、瓜作必。○古人飮食、每種各出少許、置之豆閒之地、以祭先代始爲飮食之人。不忘本也。齊嚴敬貌。孔子雖薄物必祭。其祭必敬。聖人之誠也。○此一節、記孔子飮食之節。謝氏曰、聖人飮食如此。非極口腹之欲。蓋養氣體、不以傷生、當如此。然聖人之所不食、窮口腹者、或反食之。欲心勝而不暇擇也。食sìは音嗣。陸氏曰く、魯論に、瓜を必に作る。○古人飮食するに、每種各々少許（すこしばかり）を出し、之を豆（とう；高坏）閒の地に置き、以て先代始めて飮食を爲る人を祭り、本を忘れず。齊は嚴敬の貌。孔子、薄物と雖も必ず祭る。其の祭るに必ず敬す。聖人の誠なり。○此の一節は、孔子の飮食の節を記す。謝氏、曰く、聖人の飮食此の如し。口腹の欲を極むには非ず。蓋し氣體を養ひて、以て生を傷（やぶ）らざること、當に此の如くなるべし。然れども聖人の食はざる所、口腹を窮むる者、或は反りて之を食ふ。欲心勝ちて擇ぶに暇あらずんばなり。  
■疏食菜羹瓜の瓜の釈が分かれる。疏食は麤食、麄食で、疏は粗末、雑なこと、食は飯とされ、菜羹(肉の無い野菜スープ)と並べられており、肉のない供物で祭るとならうか。そこに瓜が単品で並列されることには違和感があり、「陸氏は、魯論に、瓜を必に作る」を引いた。ただ、礼記、玉藻に、「瓜祭上環、食中棄所操」とあり、瓜を祭るに上環すとは、上を輪切りにして置き、中間を食し、手で持った所を棄てたやうで、供物を食すに少量を地に置き先代に捧げてから食す礼と釈されている。祭先とは、その礼であらうか。後藤点では瓜を「とり分ける」意味としている。我が国では、その礼を承知して、瓜（うり）のままに訓じられることが多い。

■何晏は、「孔安国曰く、齊は嚴敬貌。三物薄しと雖もこれを祭れば必ず敬す」を引いた。■皇侃は、「蔬食（そし）は麤食（そし）なり。菜羹苽祭は麤食、菜羹及び苽（まこも；穀類）を用ふを謂ふ。此れ三物を持し祭に供す。三物薄しと雖も而れども必ず宜しく齊敬の理を盡すべし。鬼神は徳を饗し味を饗さざる故なり」とした。■邢昺は、「祭は祭先を謂ふ。齊は嚴敬貌。言ふは蔬食なり、菜羹なり、瓜なり。三物薄しと雖も、將に祭先の時に食すに、亦必ず嚴敬す。○『孔安国曰、饐餲臭味變』を注す。○正義曰く、《釋器》に云く、『食（し）饐（し）す、これを餲（あい）と謂ふ』。郭璞云く、『飯饖（い）して臭し』。《説文》に云く、『饖は、飯熱に傷むなり』。《蒼頡篇》に云く、『食臭ひ敗る』。《字林》に云く、『饐は、飯熱濕に傷るなり』。○『魚敗曰餒』を注す。○正義曰く、《釋器》に云く、『肉これを敗と謂ひ、魚これを餒と謂ふ』。郭璞云く、『敗は、臭ひて壞（こぼ）つなり。餒は、肉爛（ただ）るなり』。○『孔曰』より『必敬』に至るを注す。○正義曰く、『三物雖薄、祭之必敬』と云ふは、祭は祭先を謂ふ。案ずに《玉藻》に云く、『唯水と漿（おもゆ）は祭せず』。又云く、『瓜を祭すに上環す』。此れ三者薄しと雖も、亦、祭先すを知る。若しこれを祭せば、亦必ず齊敬す」とした。  
  
○　席正しからずんば坐せず。謝氏曰聖人心安於正。故於位之不正者、雖小不處。謝氏が曰く、聖人の心、正しきに安んず。故に位の正しからざる者に於ては、小なりと雖も處らず。  
■皇侃は、「舊説に云く、鋪（ほ、敷き並べること）の周く正しからずんば、則ちこれに坐さず。故に、范寧云く、正席の所以は恭敬なり。或に云く、禮に言ふ所の如く、諸侯の席は三重。大夫は再重。是各其の正とするもの有り」とした。　■邢昺は、「此れ明らかに坐席及び飲酒の禮なり。凡そ席の禮と為すは、天子の席五重、諸侯の席三重、大夫は再重。席の南郷（嚮；向）北郷、南方（向）を以て上（かみ）と為す。東郷西郷、西方（？\*）を以て上と為す。此の如き類、是禮の正なり。若し正しからずんば、則ち孔子坐さず」とした。\*天子南面（北は玉坐、南は臣坐。西は上坐、東は下坐）。■簡潔なる五文字であるが、その決意は場の空気を凍らせる。公式の席で、皆が着席し、孔子一人が突っ立ったままといふ光景。　  
  
○ 　郷人の飮酒に、杖者出ずれば斯に出ず。杖者老人也。六十杖於郷。未出不敢先。旣出不敢後。杖者は老人なり。六十にして郷に杖（つゑ）つく。未だ出でずば敢へて先（さき）だたず。旣に出ずれば敢へて後（おく）れず。   
■何晏は、「孔安国曰く、杖者は老人なり。郷人飲酒の禮は老者を主とす。老者禮畢（をは）りて出ずれば、孔子從ひて後に出ず」を引いた。　■皇侃は、「郷人飲酒は郷飲酒の禮を謂ふ。杖者は老人なり。禮は五十にして家に杖つく。六十にして郷に杖つく。故に、老人と呼ぶに杖者とす。郷人飲酒は齡崇年を貴とす。故に出入は以て老人は節と為す。若し飲酒禮畢れば、杖者先に出ず。則ち同飲の人乃ちこれに從ひて出ず。故に、杖者出ずれば斯に出ずと云ふ」とした。■邢昺も、「杖者は老人なり。郷人飲酒の禮は、老者を主とす。老者禮畢れば出ず。孔子則ち從ひて後に出ず」とした。  
  
　郷人儺（おにやらひ）に、朝服して阼階（そかい）に立てり。儺乃多反。○儺所以逐疫。周禮方相氏掌之。阼階東階也。儺雖古禮而近於戲。亦必朝服而臨之者、無所不用其誠敬也。或曰恐其驚先祖五祀之神、欲其依己而安也。○此一節、記孔子居郷之事。儺nuóは乃nǎi多duōの反（声が合はない）。○儺は疫を逐ふ所以。周禮に方相氏これを掌る。阼階は東階なり。儺は古禮と雖も而れども戲に近し。亦必ず朝服して之に臨むは、其の誠敬を用ゐざる所無きなり。或ひと曰く、其れ先祖五祀の神を驚かさんを恐れ、其れ己に依りて安んぜんことを欲すなり。○此の一節、孔子の郷に居る事を記す。  
■何晏は、「孔安国曰く、儺は疫鬼を驅逐（くち）す。先祖を驚すことを恐れる。故に朝服して廟の阼階に立つ」を引いた。■皇侃は、「儺は疫鬼（やくき）を逐（お）ふなり。陰陽の氣をして即時退かず。疫鬼隨ひて人にして禍を作す。故に、天子、方相氏をして黄金四目、熊皮を蒙（かぶ）り、戈を執り楯を揚げ、玄衣朱裳し、口に儺儺の聲を作（な）し、以疫鬼を敺（か；追い払う）らしむ。一年に三過これを爲す。三月八月十二月なり。故に、月令季春に云く、國に儺を命ず。鄭玄云く、此の儺儺は陰氣なり。陰寒ここに至り止まず。害將に人に及ばむとす。厲鬼（れいき）これに隨ひて出で行く。仲秋に至り又云く、天子乃ち儺す。鄭玄云く、此の儺儺は陽氣なり。陽暑此に至り衰へず。害亦將に人に及ばむとす。厲鬼亦これに隨ひて出で行く。季冬に至りて又云く、有司に大儺を命ず。鄭云く、此の儺儺は陰氣なり。厲鬼將に強陰に隨ひて出で人を害す。（皇）侃、三儺を案ずに、二つは是儺陰。一つは是儺陽。陰陽乃ち異る。倶に是天子の命ず所。春是一年の始。彌（あまねし）災害を畏る。故に國民に家家悉く儺すを命ず。八月の儺は陽。陽是君の法。臣民君を儺すべからず。故に天子を稱し乃ち儺す。十二月の儺は是陰と雖も、既に一年の急に非ず。故に民も亦同じく儺すを得ず。今に云ふ郷人の儺は、是三月なり。ー　阼階は東階。主人の階なり。孔子、郷人の鬼を逐ふを聞く。宗廟に驚動せらるを恐れる。故に、朝服を著て阼階に立ち以て先祖に侍す。孝の心を爲す。朝服は玄冠緇布にして衣は素にして積裳。是卿大夫の祭服なり。禮に唯だ孤卿（少師、少傅、少保の合称）爵弁にして自祭す。卿大夫以下悉く玄冠以て自齊祭すが若し。齊祭は冠服に異ならず」とした。■邢昺は、「正義曰く、此れ明らかに孔子存室神の禮なり。儺は室を索し疫鬼を驅逐す。恐るらく先祖を驚かす、故に、孔子朝服して廟の阼階に立つ。鬼神は人に依る。其れ已に依り安んずを庶（ねが）ふ。朝服たる所以は、大夫は朝服して以て祭す。故に祭服を用ゐ以て神に依る」とした。  
  
○　人を他邦に問へば、再拜して之を送る。拜送使者、如親見之敬也。拜して使者を送るは、親しく之を見るが如くす、敬なり。  
■問人於他邦　人とは使者のこと、問人とは使者を遣（おく）ること。皇侃は他邦を隣国の君とみている。曲礼に、「若し人をして君の所に使せしむれば、則ち必ず朝服して之に命ず。使者反（かへ）れば、必ず堂を下りて命を受く」とある。敬を主とし、自国の君と隣国の君とは元来は兄弟、その子孫は親戚関係にあり、人臣の礼の延長上にあるがごときもので、使者の派遣を他国との外交と考へる感覚とは異なる。■何晏は、「孔安国曰く、拜して使者を送るは敬なり」を引いた。■皇侃は、「問は更相（交互の）聘問を謂ふ。他邦は鄰國の君を謂ふ。謂ふは、孔子、鄰國と交遊して往（さきの）彼の聘問時に使（つかひ）を遺（おく）る。既に彼の君を敬す。故に使を遣る。使者去るに、則ち再拜してこれを送る。人臣の禮を爲し乃ち外に交ること無し。而して孔子は聖人、東西に應聘し疑無し」とした。■邢昺は、「此れ孔子の人を遺る禮を記す。問は猶遺のごとし。問に因り物有りてこれを遺るを謂ふ。問は、或ひは自ら事有れば人を問ふ、或ひは彼に事有るを聞きてこれを問ふ。悉く物有りて其の意を表はす。故に、《曲禮》に云く、『凡そ弓劍（きゅうけん）苞苴（ほうしょ）簞笥（たんし）を以て人に問ふは、操りて以て命を受くこと、使の容の如し』。此れ孔子凡そ物を以て人を他邦に問遺するは、必ず再拜して其の使者を送る。敬を示す所以なり」とした。  
　康子藥を饋（おく）れり。拜して之を受く。曰く、丘未だ達せず。敢へて嘗めず。范氏曰凡賜食必嘗以拜。藥未達、則不敢嘗。受而不飮、則虛人之賜。故告之如此。然則可飮而飮、不可飮而不飮、皆在其中矣。楊氏曰、大夫有賜、拜而受之、禮也。未達不敢嘗、謹疾也。必告之、直也。○此一節、記孔子與人交之誠意。范氏が曰く、凡そ食を賜へば必ず嘗めて以て拜す。藥未だ達せずば、則ち敢へて嘗めず。受けて飮まずんば、則ち人の賜を虛しくす。故に之に告ぐること此の如し。然れば則ち飮む可くして飮み、飮む可からずして飮まざること、皆其の中に在り。楊氏曰く、大夫賜ふこと有れば、拜して之を受くるは禮なり。未だ達せず敢へて嘗めずは、疾を謹むなり。必ず之に告ぐるは、直なり。○此の一節は、孔子人と交はる誠意を記す。  
■何晏は、「包氏曰く、孔子に藥を饋れり」、「孔安国曰く、未だ其の故を知らず、故に不敢へて嘗めず。禮なり」を引いた。■皇侃は、「饋は餉（おくる）なり。魯の季康子、孔子に藥を餉る。孔子彼の餉を得て拜受す。是禮なり」、「達は猶曉解（はっきりと分かる）なり。孔子拜受すと雖も遂に飲まず。故に名を稱して云く、丘未だ此の藥何の疾を治すを曉（あきらか）ならず。故に敢へてこれを飲嘗せず」とした。■邢昺は、「此れ孔子の受饋の禮を明らかにす。魯の卿、季康子孔子に藥を饋り、孔子これを拜して受く。凡そ受く人、饋遺され食すべき物、必ず先ず嘗めてこれを謝す。孔子未だ其の藥の故に達せず。敢へて先ず嘗めず。故に曰く、『丘未だ達せず。敢へて嘗めず』、亦其れ禮なり」とした。  
  
○　廏（うまや）焚（や）けたり。子朝より退（まか）りて曰はく、人傷（そこな）へりや。馬を問はず。非不愛馬。然恐傷人之意多。故未暇問。蓋貴人賤畜、理當如此。馬を愛せには非ず。然に人を傷はんことを恐る意多し。故に未だ問ふに暇あらず。蓋し人を貴び畜を賤しむ、理は當に此の如くなるべし。  
■何晏は、「鄭玄曰く、人の重くして畜を賤（いやし）む。朝を退るは、君の朝より來（まか）り歸る」を引いた。■皇侃は、「廐は馬を養（か）ふ處なり。焚は燒なり。孔子、家馬養ふ處燒かる」、「孔子早くに朝に上る。朝竟（をは）りて退りて家に還る。少儀に云く、朝廷に退と曰く」、「朝より還退す。廐火に遭はる。廐は是馬を善（よし）とする處。而るに孔子馬を傷ふを問はず。唯人を問ふ。是人を重くして馬を賤む。故に馬を問はずと云ふ。王弼曰く、孔子時に魯の司寇を爲す。公朝より退りて火の所に之く。馬を問はずは、馬を重ずを矯時（当時の弊害を匡）すものなり」とした。■邢昺は、「此れ明らかに孔子人を重くして畜を賤むなり。廄焚は、孔子の家の廄火（や）かるを謂ふ。孔子朝を罷（まか）り退り歸り、告を承けて問ひて曰く、『廄焚ける時に、得て人傷ふこと無きか？』。馬を傷ふことを問はずか否か。是其れ人を重くして畜を賤しむ意。『不問馬』の一句は、記した者の言なり」とした。  
  
○　君食を賜へば、必ず席を正しふして先ず之を嘗む。君腥（なまくさき）を賜へば、必ず熟して之を薦む。君生を賜へば、必ず之を畜（か）ふ。畜許六反。○食恐或餕餘。故不以薦。正席先嘗、如對君也。言先嘗、則餘當以頒賜矣。腥、生肉。熟而薦之祖考、榮君賜也。畜之者、仁君之惠、無故不敢殺也。畜xùは許xū六liùの反。○食は或は餕餘（食べ残し）を恐る。故に以て薦めず。席を正しふして先ず嘗むは、君に對するが如し。先ず嘗むと言へば、則ち餘は當に以て頒賜すべし。腥は生肉。熟（煮）して之を祖考に薦む。君の賜を榮とす。之を畜ふは、君の惠を仁とし、故無んば敢へて殺さず。  
■何晏は、「孔安国曰く、君の惠を敬すなり。既にこれを嘗れば、乃ち以て班（わ）き賜ふ」、「孔安国曰く、其れ先祖に薦む」を引いた。　■皇侃は、「席猶坐なり。君孔子に食を賜へば、孔子食を嗜（たし）なまずと雖も、必ず坐を正して先ずこれを嘗むは、君の惠を敬すなり」、「君が孔子に腥肉を賜ふを謂ふ。宗廟に薦を薦す。孔子これを受け、煮熟して宗廟に薦す。重ねて君の賜を榮す。賜はりし熟食を薦めざるは、熟を褻（け；熟食は既に自分が嘗めているため「汚れた」とする）と爲す」、「生は活物を謂ふ。得て活物を賜はれば、當にこれを養ひ畜ふべし。祭祀の時至るを待ち牲用に充てる」とした。■邢昺は、「此れ明らかに孔子君の賜食を受け侍食の禮に及ぶ」、「謂ふは、君以て熟食を已に賜へば、必ず席を正して坐し、先ず品これを嚐（味見）し、君の惠に敬す。君の賜必ず多くば、君の惠を留むべからずして、既に嘗め、當に以て班賜すべし（分け与ふ）なり」、「謂ふは、君已に生肉を賜へば、必ず烹熟して其れ先祖に薦め、君の賜に榮す。熟食を薦めずは、褻なり。君生を賜へば、必ずこれを畜ふは、君已に牲の未だ殺さぬを賜ふは、必ずこれを畜ひ養ひ、以て祭祀の用に待つを謂ふなり」とした。  
　君に侍食（じしよく）して、君祭れば先ず飯（はん）す。飯扶晩反。○周禮、王日一擧、膳夫授祭、品嘗食、王乃食。故侍食者、君祭則己不祭而先飯。若爲君嘗食然。不敢當客禮也。飯fǎnは扶fú晩wǎnの反。○周禮に、王は日に一ど擧す、膳夫祭を授く。品ごとに嘗めて食ふ。王乃し（ここに於いて）食ふ。故に食に侍すは、君祭れば、則ち己祭らずして先ず飯す。君の爲にして嘗めて食ふが若く然り。敢へて客の禮に當らず。  
■何晏は、「鄭玄曰く、君祭るに於て、則ち先ず飯す。君の為に嘗めて食ふが若く然り」とした。■皇侃は、「孔子君に侍し共食の時を謂ふ」、「祭は祭食の先を謂ふ。夫の禮。食は必ず先ず食を取る。種種の片子（切れ端）を俎豆の邊地に置く。名づけて祭と爲す。祭は昔し初めて此の食を造りたる者に報（むく）いるなり。君子惠を得れば報いることを忘れず。故に將に食ふに先ず報を出す。君政祭食の時に當りて、而して臣先ず飯を取りてこれを食ふ。故に先飯と云ふ。飯は食なり。然りとする所以は、君の爲に先ず嘗食を示す。先ず調和の是非を知るものなり」とした。■邢昺は、「《曲禮》に云く、『主人客を延（ひ）きて祭る』の注に云く『祭は祭先なり。君子は事有れば本を忘れず』。君子は本を忘れずとは、德有れば必ずこれに酬ふ。故に食を得れば、種種少許（すこしばかり）を出し、豆間の地に置在し、以て先代造食の人に報いるなり。若し敵（対等の者）ならば、客則ち得て先に自ら祭す。降等（格下）の客ならば則ち後に祭る。若し臣が君に侍してこれを賜ひ食ふに、則ち祭らず。若し食を賜へば、君客禮を以てこれに待して、則ち得て祭る。得て祭ると雖も、又先ず君命の祭を須べし。後に乃ち敢へて祭る。此れ祭先飯と言ふは、則ち是客の禮に非ず。故に祭らずして先ず飯す。君の為に食を嘗すが若き然り」とした。  
　疾、君之を視るは、東首して朝服を加へ紳を拖（ひ）く。首去聲。拖徒我反。○東首以受生氣也。病臥不能著衣束帶、又不可以褻服見君。故加朝服於身、又引大帶於上也。首shòuは去聲。拖tuōは徒tú我wǒの反（声が合はない）。○東首は、以て生氣を受くる。病臥して衣を著け束帶すること能はず、又褻の服を以て君に見ゆ可からず。故に朝服を身に加へ、又大帶を上に引く。  
■何晏は、「包氏曰く、夫子疾す。南牖の下に處る。東首して、其れ朝服を加へ紳を拖く。紳は大帶。敢へて朝服を衣ずして君に見へず」を引いた。■皇侃は、「疾は孔子疾病の時を謂ふ。孔子病して魯君來りてこれを視る。此の君は是哀公なり」、「病者は生を欲す。東は是陽の氣を生む。故に眠首は東なり。故に玉藻に云く、君子の居は恆に戸に當る。寢るに恆に東首すは、是なり」、「加は覆なり。朝服は健時に君に從ひ日に視朝の服を謂ふ。拖は猶牽なり。紳は大帶なり。孔子既に病みて復衣を著くこと能はず。而して君に見ゆに私服宜しからず。故に朝服を加へ體上を覆ふ。而して大帶を心下に牽引し是に至る。健時に衣を著くが如く爲す。―　病は本より戸に當りて北壁の下に在り東首す。君既に來りて君北面すは宜しからず。故に移りて南窗の下に處る。君をして戸より入らしめ、西に轉じ面得て南に向く。故に欒肇に云く、南牖の下南面してこれを視しむを欲すものなり」とした。■邢昺は、「此れ明らかに孔子疾有りて、君來りてこれを視る時なり。拖は加なり。紳は大帶なり。病者は常に北牖下に居る。君來りて視る為に、則ち暫時遷りて南牖下に鄉す。東首は君をして得て南面しこれを視しむ。病臥を以て朝服及び大帶を衣ること能はず、又敢へて朝服を衣ずして君に見へず、故に但に朝服を身に加へ、又上に大帶を加ふ、是禮なり」とした。  
　君命じ召せば、駕を俟（ま）たずして行く。急趨君命。行出而駕車隨之。○此一節、記孔子事君之禮。急に君命に趨（はし）る。行出で駕車これに隨ふ。○此を一節は、孔子、君に事る禮を記す。  
■何晏は、「鄭玄曰く、急に君命に趨る、行出して車駕これに隨ふ」を引いた。■皇侃は、「君命有り孔子を召し見る時を謂ふ。君尊くして命重し。故に召を得て駕車を俟たずして即ち徒趨して往く。故に玉藻に云く、君命じ召すは三節を以てす。一節は以て趨る。二節は以て走る。宮に在りては屨（くつ）を俟たず、家に在りては車を俟たず。是なり」とした。■邢昺は、「此れ孔子急に君命に趨るを明らかにす。俟は猶待のごとし。謂ふは、君命じ召す。已にして駕車を待たずして即ち行出す。車當に駕してこれに隨ふ」とした。■趨は説文に「走なり。走に従ひ芻は聲」とあり、注に、「曲禮の注に曰く、行きて足を張るを趨と曰ふ」とある。一方、走は「趨なり」とあり、注に、「釋名に曰く。徐行を步と曰ふ。疾行を趨と曰ふ。疾趨を走と曰ふ」とある。芻は「詩、小雅、白駒（はくく）」に「生芻一束」とあり、神に捧げる刈りたる艸（くさ）とされた。人の形に作るものを芻霊としてお祓いの「かたしろ」としたともある。芻には、元来、敬する心が含まれていたのであらう。  
  
○　大廟に入りて、事每（こと）に問ふ。。重出。重出。  
■八佾第三に「子入大廟毎事問或曰孰謂鄹人之子知禮乎入大廟毎事問子聞之曰是禮也」とある。■何晏は、「鄭玄曰く、君の為に祭を助くるなり。大廟は周公の廟なり」を引いた。　■皇侃は、「或に云く。此の句煩重。舊通に云く、前に是孔子對或人の時記す。此れ是平生常行の事を錄す。故に兩出す」とした。■邢昺は、「此れ孔子祭を助くるに因り太廟廟中に入り、禮儀祭器これを知ると雖も、猶事每に復た問ふを明らかにす。慎の至なり」とした。  
  
○ 　朋友死して、歸する所無し。曰はく、我に於て殯（もがり）せよ。朋友以義合。死無所歸、不得不殯。朋友は義を以て合ふ。死して歸する所無し。殯せざることを得ず。  
■何晏は、「孔安国曰く、朋友の恩を重しとす。歸する所無しは、親昵（しんじつ；昵懇にする）無し」を引いた。　■皇侃は、「殯は寢に於て停喪し以て葬を待つを謂ふ。時に孔子朋友有り。孔子の家に在りて死す。而して此の朋友親情し來奔して喪す者無し。故に、歸する所無しと云ふ。既に未だ歸する所有らず。故に曰く、我に於て殯せよと」とした。■邢昺は、「此れ孔子朋友の恩を重きを明らかにす。言ふは、朋友若し死し、更に親昵歸すべき無くば、孔子則ち曰く、『我に於て殯せよ』。これに喪主と為る」とした。  
　朋友の饋（をくりもの）は、車馬と雖も、祭肉に非ずして拜せず。朋友有通財之義。故雖車馬之重不拜。祭肉則拜者、敬其祖考、同於己親也。○此一節、記孔子交朋友之義。朋友財を通ず義有り。故に車馬の重しと雖も拜せず。祭の肉則ち拜するは、其の祖考を敬する、己が親に同じふす。○此の一節、孔子の朋友に交はる義を記す。  
■何晏は、「孔安国曰く、拜せず、財を通ず義有れし」を引いた。　■皇侃は、「朋友物有りて餉（おく）らるを謂ふ」、「車馬は家財の大なるものなり。朋友財を通ず義有り。故に、復（また）車馬を餉らると雖も、我拜して謝さず。拜すべき所は、若し朋友其の家の祭肉を餉られば、小と雖も亦これを拜して受く。祭を敬す故なり。故に車馬と雖も祭肉に非ずんば拜せずを云ふ」とした。■邢昺は、「此は孔子、財輕く祭重き禮を言ふなり。朋友財を通ず義有り。故に、其の饋遺の物は、是れ車馬と雖も、祭肉に非ずんば、これを拜して謝せず。言其れ祭肉ならば則ちこれを拜す。神惠を尊ぶなり」とした。  
  
○　寢ぬるに尸（し）せず。居るに容（かたち）つくらず。尸謂偃臥似死人也。居居家。容容儀。范氏曰、寢不尸、非惡其類於死也。惰慢之氣、不設於身體。雖舒布其四體、而亦未嘗肆耳。居不容、非惰也。但不若奉祭祀見賓客而已。申申夭夭、是也。尸は、偃臥して死人に似たるを謂ふ。居は家に居る。容は容儀なり。范氏曰く、寢ぬるに尸せずは、其の死に類するを惡むには非ず。惰慢の氣、身體に設けず。其の四體を舒布（のばす）すと雖も、而して亦未だ嘗て肆せざる（気ままにはしない）のみ。居るに容せずは、惰する（だらける）には非ず。但に祭祀に奉じ賓客を見るが若くせざるのみ。申申夭夭、是れなり。（子の燕居するや、申申如たり。夭夭如たり「述而篇」のびのびとしてにこやかなこと）。  
■何晏は、「包氏曰く、偃臥四體（身体仰臥臥）は、手足を布展し（伸ばして布で覆ふ）、死人に似たり」、「孔安国曰く、家室の敬久まれ難きが為なり」を引いた。　■皇侃は、「寢は眠なり。尸は死尸を謂ふ。眠は當に小欹（横臥）のごとし。直脚申布し死人に似たる者たるを得ず。―　偃却（横になり休む）眠なり。展舒（のびくつろぐ）なり。曲禮に云く。寢して伏すこと無し。此れ云ふは、四體偃臥し手足を展舒し、死人に似ず。則ち得て覆却せず（仰向けで休まない）。唯に當に欹して（横たわり）小屈するがごとし」、「家中に常居すを謂ふ。家主は和して怡（なご）む。燕居の貌は溫溫（おだやかでなごむ）。故に、容を為さず自らに處る者なり」とした。■邢昺は、「此れ孔子の寢息、居家の禮を言ふ。剩蒢？死人なり。言ふは、人四體を偃臥し、手足を布展し、死人に似たる。孔子則ち當に欹屈す。其れ居家の時、則ち容儀為さず。室家の敬久くし難き為に、當に和舒すがごとし」とした。  
　齊衰（しさい）の者を見ては、狎（こう）と雖も必ず變ず。冕者（べんしや）と瞽者（こしや）とを見ては、褻（せつ）と雖も必ず貌（かたち）を以てす。狎謂素親狎。褻謂燕見。貌謂禮貌。餘見前篇。狎は素より親に狎（な）るるに謂ふ。褻は燕見を謂ふ。貌は禮貌を謂ふ。餘は前篇に見える。  
■何晏は、「孔安国曰く、狎は素より親狎す」、「周生烈曰く、褻は數（しばしば）相ひ見るを謂ふ。必ず當に貌を以て之を禮すべし」を引いた。　■皇侃は、「狎は素より相ひ親しみ狎るるを謂ふ。哀に喪有り、故に必ず變ず。必變は必ず作（な）し必ず趨（はし）るを謂ふ」、「褻は親無く卑數者（近しい顔見知りの者）を謂ふ。在位を尊び、不成人を恤（あはれ）む。故に必ず貌を以てす。貌を以て（顔）色を變じこれに對ず。變重く貌輕し。親狎重し、故に變を言ふ。卑褻輕し、故に貌を以てす。然して前篇に必ず作し必ず趨る。疎者を見るを謂ふ」とした。■邢昺は、「此の一節は孔子哀恤（あいじゅつ）せられ敬重の事に及び、これを為すに容を變ずを言ふ」、「狎は素より相ひ親しみ狎るるを謂ふ。言ふは、齊衰喪服を衣る者を見れば、素より親狎と雖も、亦必ず為に容を變ず。此れ即ち哀に喪有り」、「冕は大夫の冠なり。瞽は盲なり。褻は數（しばしば）相ひ見るを謂ふ。言ふは、孔子大夫と盲者とを見れば、數相ひ見ると雖も、必ず當に貌を以てこれに禮すべきこと。此れ即ち在位を尊び、不成人を恤むなり」、「案ずに、《左傳》の『宋の華弱と樂輿とは少（わか）くして相ひ狎れる』、《曲禮》に云ふ『賢者は狎れてこれを敬す』、狎は是れ相ひ褻慢（荘重でない）、相ひ貫習（熟知する）の名なり、故に素より相ひ親狎と為す」とした。■前篇とは子罕篇、「子見齊衰者冕衣裳者與瞽者見之雖少必作過之必趨」この時は、「少（わか）」きと雖も「趨」とあった。褻を古注は「数相見」「無親而卑數者」とし、人間関係が狎より薄いが顔見知りの者とする。そうであっても冕者と瞽者には貌の礼をなすとした。朱熹は「燕見」とした。燕見とは私見のことで非公式、朝廷外での出会のこと、公式の礼が適用されない所であるがこの場合には貌の礼をなしたと視点を変へている。冕者は大夫以上、瞽者を不成人、身体機能が十分でない人とするが、楽師を想定していやう。  
　凶服の者には之に式（しよく）す。負版（ふはん）の者に式す。式車前橫木、有所敬、則俯而憑之。負版持邦國圖籍者。式此二者、哀有喪、重民數也。人惟萬物之靈、而王者之所天也。故周禮獻民數於王、王拜受之。況其下者、敢不敬乎。式は車の前の橫木、敬する所有れば、則ち俯して之に憑（よ）る。負版は、邦國の圖籍を持する者。此の二つの者に式するは、喪有るを哀しみ、民の數を重んず。人は惟れ萬物の靈、而して王者の天とする所。故に、周禮に、民の數を王に獻れば、王拜して之を受く、と。況や其の下なる者、敢へて敬せざらんや。  
■何晏は、「孔安国曰く、凶服は送死の衣物。負版の者は邦國の圖籍を持する者」を引いた。■皇侃は、「凶服は死人を送る衣物なり。孔子、他人の送死の衣物を見れば。必ず敬を為してこれに式す。式は古人路車に乘る。今の龍旂車（龍旗車は諸侯の車）の如し。皆車に於ては中に倚立す。倚立は久くすること難し。故に車に箱上に一横木に安んず。手を以てこれを隱し憑る。これを謂ひて較と爲す。詩に云ふ、「較に倚重す」、是なり。又、較の下未だ車床に至らぬ半ば許（ばか）りに、一横木に安んず。名づけて軾と爲す。若し車上に在りて應（こた）へて敬を爲す時、則ち手を落し軾に憑る。軾に憑るは則ち身俯僂（ふる；低頭曲背）す、故に、これを式と云ふ。式は軾なり。―　此れ式凶服を釋すなり」、「負は擔掲（たんけい；担い掲げる）を謂ふ。版は邦國の圖籍を謂ふ。古（いにしへ）未だ紙有らず。凡そ書畫する所皆版に於ける。故に版と云ふ。孔子、人國の圖（図）版を擔掲する者を見れば、皆これに式し敬す。鄭司農、宮伯職を注して云く、版は名籍なり。版を以てこれを為す。今時の鄉戸籍、これを戸版と謂ふ。鄭康成、内宰に注して云く、版は宮中閽寺（こんじ；閽は中門の禁を掌り、寺は入の禁令を掌る）の屬及び其の子弟籍を錄すを謂ふ。圖は王及び后、世子の宮中、吏官これを府（保管）す形象」とした。■邢昺は、「囚服は、送死の衣物なり。負版者は、是邦國の圖籍を持する者なり。式は車上の橫木、男子立ちて乘る。敬す所有れば、則ち俯して式に馮る。遂に式を以て敬の名と為す。言ふは、孔子乘車の時、送死の衣物を見、邦國の圖籍を持する者を見れば、皆式に馮りてこれを敬す」、「案ずに、《周禮·小宰職》に曰ふ『閭里を聽くに版圖を以てす』、注に云く、版は是れ戶籍圖なり。人地を訟すを聽くは、版圖を以てこれを決す。《司書職》に曰ふ『邦中の版、土地の圖』、圖籍を以て相ひ將す（定め従ふ）物、故に負版者是れ邦國の圖籍を持すを知る」とした。  
　盛饌有れば、必ず色を變じて作（た）つ。敬主人之禮。非以其饌也。主人の禮を敬す。其の饌を以てするに非ず。  
■何晏は、「孔安国曰く、作は起なり。主人の親（みずか）ら饋（すすむ）を敬す」を引いた。■皇侃は、「作は起なり。孔子、主人の食饌盛有りて平常を見る。故に色を變じて起つ。然りとする所以は、主人親ら饋むにより、故に客起ちて敬す。―　親饋は主人自ら食を執りてこれを設くを謂ふ」■邢昺は、「作は起なり。人盛饌を設け己に待すを謂ふ。已必ず容を改めて起つ。主人の親饋を敬す」とした。  
　迅雷（じんらい）風烈には、必ず變ず。迅疾也。烈猛也。必變者、所以敬天之怒。記曰若有疾風迅雷甚雨、則必變。雖夜必興、衣服冠而坐。○此一節、記孔子容貌之變。迅は疾なり。烈は猛なり。必ず變ずは、天の怒を敬す所以なり。記に曰く、若し疾風迅雷甚雨有れば、則ち必ず變ず。夜と雖も必ず興き、衣服し冠して坐す、と。○此の一節、孔子の容貌の變を記す。  
■何晏は、「鄭玄曰く、天の怒、風疾く雷烈と為すを敬す」を引いた。　■皇侃は、「迅は疾なり。風して雷は疾急、名づけて烈と為す。風疾くして雷。此れ是、陰陽の氣激しく天の怒と為す。故に、孔子自ら顏容を整へ變じ以てこれを敬す。故に、玉藻に云く、『若し疾風迅雷甚雨ならば則ち必ず變ず。夜と雖も必ず興き、衣服冠して坐す』。是なり」■邢昺は、「迅は急疾なり。風疾く、雷烈と為す。此れ陰陽の氣激しく、天の怒と為す。故に孔子必ず容を變じこれを敬す」とした。  
  
○ 　車に升らば、必ず正しく立ちて綏（すい）を執る。綏挽以上車之索也。范氏曰、正立執綏、則心體無不正、而誠意肅恭矣。蓋君子莊敬、無所不在。升車則見於此也。綏は挽きて以て車に上る索（なわ）なり。范氏曰く、正しく立ちて綏を執れば、則ち心體正しからざること無くして、而して誠意肅恭なり。蓋し君子莊敬在らざる所無し。車に升りて則ち此に見（あら）はる。

軛

轅

?

**牛**

輿

軛

轅

?

**牛**

輿

|  |  |
| --- | --- |
| 「較 軾」の画像検索結果 K’sBookshelf辞典（[HP](http://ksbookshelf.com/DW/Kanjirin/appendix/ZuhanIchiran.html)） | ■何晏は、「周生烈曰く、必ず正しく立つを。綏を執るは、安を為す所以」を引いた。■皇侃は、「孔子の升車禮を謂ふ。綏は牽上車の繩なり。升車時の若きは則ち正しく立ち而して綏を執る以上、安を為す所以」とした。■邢昺は、「此れ孔子の乘車の禮を記す」、「綏は挽きて以て車に上る索なり。言ふは、孔子升車の時、必ず正しく立ちて綏を執り、安を為す所以なり」、「（周生烈曰に注して）衡軛（こうやく）是れ轅（えん；ながえ）端の橫木、馬領を駕す者。《輿人》注に云く、『較は兩輢上に出ず軾なる者』則ち輢轂（きこく）俱に車の兩傍に在り。言ふは、孔子、車中に在り、前に視るは則ち衡軛の前にすぎず、傍を視るは則ち輢轂の後にすぎず。案ずに《曲禮》に云く、『立てば五巂（けい；16歩半先）を視、式すれば馬尾を視、顧ること轂にすぎず。』注に云く、『立は平視なり。巂は猶規なり。輪轉の度を謂ふ』。案ずに車輪一周を一規と為す。乘車の輪高は六尺六寸、徑は一圍三，三六十八（円周率？実際は3で計算している）。 |

一丈八尺（6尺ｘ3）を得、又六寸（6寸ｘ3）を一尺八寸と為す、總て一規を一丈九尺八寸（19.8尺）と為す。五規は九十九場（99尺）を為し、六尺を步と為せば，總て十六步半と為る。則ち車上に在りて得て前十六步半を視る。而して此れ注に云ふ『前視不過衡軛』は、禮に言ふ中人の制、此れ聖人の行を記す。故に前視は但に衡軛にすぎざるのみ」とした。  
　車の中にて内顧（ないこ）せず。疾言（しつげん）せず。親指（しんし）せず。内顧囘視也。禮曰顧不過轂。三者皆失容、且惑人。○此一節、記孔子升車之容。内顧は囘視なり。禮に曰く、顧ること轂（しんき）を過ぎず。三つの者は皆容を失い、且人を惑はす。○此の一節、孔子の車に升る容を記す。  
■何晏は、「包氏曰く、車中にして內顧せざるは、言ふ、前を視ること衡軛を過ぎず。傍を視ること輢轂を過ぎず」を引いた。■皇侃は、「内は猶後のごとし。顧は頭を迴（かえ）すなり。升は車上に在り。頭を後に迴さず顧るなり。然りとなす以所は、後人己に從ふ者、常に正しきこと能はず。轉顧して之を見るが若きは、則ち人の私の不備を掩（えん；不意をうつ）す。大德の為す所に非ず。故に為さず。衞瓘（220～291西晋軍人、政治家）云く。人の不備を掩せず。―　車床を輿と名づく。故に輿中と云ふ。衡枙は轅の端なり。前を視るが若きは得て遠からず。故に曲禮に云く。立てば五巂を視る。五巂は九丈九尺の地なり。式は馬尾を視る。馬尾は車床の欄閒の近くに在り。竝びに是れ衡枙に過ぎずの類なり。―　旁を視ること輢轂に過ぎずと云ふは、旁は兩邊を謂ふ。輢竪（きけん）は車箱の兩邊、三分し前に居る一（？）に在り、較を承く者なり。轂は箱の外に在り。人の兩邊に當る。故に旁を視るに輢轂に過ぎずと云ふ」、「疾は高急なり。車上に在りては言高くなり易し。故に、疾言せず、人に驚を爲す。故に繆協云く、車行けば則ち言傷疾す」、「車上既に高し。亦得て手親ら指點する所有らず。下人に惑を為す」とした。■邢昺は、「顧は回視を謂ふ。言ふは、孔子車中に在りて內を鄉き回顧して、人の私を掩せず」、「亦、車中に在る時を謂ふ。疾は急なり。車中既に高きを以てす。故に、疾言せず、親ら指す所有らず。皆人に惑を為す」とした。  
  
○　色のままに斯れ擧（きょ）す、翔（ふるま）って後に集る。言鳥見人之顏色不善、則飛去、囘翔審視而後下止。人之見幾而作、審擇所處、亦當如此。然此上下必有闕文矣。言ふは、鳥、人の顏色の善からざるを見て、則ち飛び去る。囘翔して審らかに視て而して後に下り止まる。人の幾を見て作（た）ち、審らかに處る所を擇ぶこと、亦當に此の如くすべし。然れども此の上下に必ず闕文有り。  
■何晏は、「馬融曰く、顏色を見て善からずんば則ち之を去る」、「周生烈曰く、回翔し審觀して而して後に下り止まる」を引いた。■皇侃は、「孔子、在處にて人の顏色を觀て而して舉動すを謂ふ。―　繆協云く、親指より以上は鄉黨拘拘の禮。事に應じ適用の跡を詳（つまひらか）にす。其の禮有りて而れども其の時無し。蓋し天運の極なり。將に遠感高興有らん。故に色斯に舉ぐ」、「孔子所至の處を謂ふ。必ず廻翔し審觀の後乃ち下りて集ふ」とした。■邢昺は、「此れ言孔子去就を審（つまひらか）にす。孔子の所處を謂ふ。顏色不善を見れば、則ち斯に舉動し而してこれを去る。將に依就す所、則ち必ず回翔し審觀し而して後に下りて止む。此の「翔而後集」の一句は、以て飛鳥に喻ふ」とした。  
　曰はく、山梁の雌雉（しち）、時なるかな時なるかな。子路之を共す。三たび嗅ひて作（た）つ。共九用反、又居勇反。嗅許又反。○邢氏曰、梁橋也。時哉言雉之飮啄得其時。子路不達。以爲時物而共具之。孔子不食。三嗅其氣而起。晁氏曰、石經嗅作戞。謂雉鳴也。劉聘君曰、嗅當作臭。古闃反。張兩翅也。見爾雅。愚按、如後兩說、則共字當爲拱執之義。然此必有闕文。不可彊爲之說。姑記所聞、以俟知者。共gǒng（拱）は九jiǔ用yòngの反（音声合はず）、又、居jū勇yǒngの反（声合はず）。嗅xiùは許xū又yòuの反（音合はず）。○邢氏（邢昺）が曰く、梁は橋なり。時なるかなは、言ふは、雉の飮啄、其の時を得る。子路達せず。以爲らく時の物と。之を共具す。孔子食はず。三たび其の氣を嗅ぎて起つ。晁氏が曰く、石經嗅を戞（かつ）に作る。雉の鳴くを謂ふ。劉聘君曰く、嗅は當に臭に作るべし。古gǔ闃qùの反なり。兩翅（はね）を張るなり（三度羽ばたいて飛び立つとした）。爾雅に見ゆ。愚按ずるに、後の兩說の如きは、則ち共の字は當に拱執（手をこまねきとる）の義と爲すべし。然れども此れ必ず闕文有り。彊（し）いて之れ說を爲す可からず。姑（しばら）く聞く所を記し、以て知者を俟つ。  
■何晏は、「言ふは、山梁の雌雉其の時を得、而して人其の時を得ざる。故にこれを歎ず。子路以て其の時物とりき。故にこれを共具す。本意に非ずして、苟も食はず。故に三たび嗅（か）ぎて而して起（た）つ」とした。■皇侃は、「此の記者は孔子因りて見て歎ずこと有る所を記す。梁は木を以て水上に架し、踐みて水を渡る可き處なり。孔子、山梁の閒過より山梁閒に此の雌雉有るを見る。時哉は、雉逍遙として時を得る所を言ふ。歎ずこと有る所以は、人亂世に遭ふを言ふ。翔集して其の所を得ず。是れ時を失ふ。而して梁閒の雉が十步して一啄百步して一飲すに如ず、是れ其の時を得。故にこれを歎ず。獨、雌を云ふは、見る所に因りて言ふなり」、「子路、孔子に達せず、時哉時哉の歎。而して謂ふは、雌雉を歎ず是れ時月の味。故に馳せ逐ひ驅け拍し遂に雌雉を得。煮熟して進め以て孔子に供養す。故に、子路これを供すと云ふ」、「臭は鼻で其氣を翕（す；吸）ふを謂ふ。作は起なり。子路、孔子の意に達せず。而して此の熟雉を供す。孔子の本心に乖（もと）る。孔子、若し、直爾に食はずんば、則ち恐るらくは子路怨を生（おこ）す。若し、遂にしてこれを食はば、則ち又我が本心に乖る。故に先ず三たび氣を嗅ぎて後に乃ち起つ。亦、食と不食の閒を得るが如し。―　顧歡（こかん、425年?-488年?、南朝著名道士）云く。夫れ一丘に栖遲す（游息。詩經．陳風．衡門、「衡門之下，可以棲遲」）。雉の道適（かな）ふ。剛武を以て雌の徳を傷性せず。故に、翔びて下に集る。繼くに斯の歎を以てす。而して仲由の獻。偶と歎と諧（かな）はず。若し即ちこれを饗すは、則ち事と情と反す。若し棄てば御せず。則ち由や失有るが似（ごと）し。故に三たび嗅ぎて起つ。則ち心と事と雙（なら）びに合ふ。虞氏贊（論語九巻鄭玄注，晉散騎常侍 虞喜讃）曰く、色斯舉矣翔而後集。此を以て人事を雉に喻ふ。雉の物精狎れ難しを儆（いまし）む。人の亂世に在るに譬ふ。危を去り安に就く。當に雉の如し。山梁雌雉時哉と曰はく。以て此の解は上の義なり。時は是なり。供は猶設のごとし。言ふは、子路、雉山梁に在るを見る。因りて食物を設（お）きて以てこれを張る。雉の性明微にして其の非常を知る。三たび嗅ぎて作去す。其の供を食はず。正に雌なる者を言ふ。子路の見る所を記す」とした。■邢昺は、「此れ孔子の物に感じ而して歎ずを記す。梁は橋なり。共は具なり。嗅は鼻其の氣を歆（う）く（味はふ）を謂ふ。作は起なり。孔子、山梁に行ぃ、雌雉が飲み啄（つい）ばぶに所を得を見る。故に、歎じて曰はく、『此の山梁の雌雉、其の時を得るかな！』而るに人其の時を得ず。子路失指（誤解）す。夫子時なるかなと云ふを以為（おも）へらくは、是れ時の物と言ふと。故に取りてこれを共具す。孔子、以て已が本意に非ず。義は苟しくも食はず。又子路の情に逆ふべからず。故に但に三たび其の氣を嗅ぎて起つ」とした。  
■司馬遷、孔子世家に、「孔子、蔡に遷りて三歳（BC489）、呉、陳を伐つ。楚、陳を救ふために、城父（じょうほ）に軍す。孔子、陳と蔡の閑（間）に在（ま）すと聞き、楚、人をして孔子を聘（へい）せしむ。孔子、將に往きて禮を拜せむとするに、陳、蔡の大夫、謀りて曰く、『孔子、賢者にして、刺譏（しき：せめそしる）する所、皆、諸侯の疾（やまい）に中（あた）る。今は、久しく陳、蔡の間に留まりて、諸大夫が設け行ふ所、皆、仲尼の意に非ず。今、楚、大國なりて、孔子を來聘（らいへい）して、孔子、楚に用ひられば、則ち陳、蔡の事を用ひる大夫、危ふからむ』。是に乃ち相（あ）ひ與（とも）に徒役を發し孔子を野に圍む。行くを得ずして、糧（かて）絶つ。從者病みて（疲れ果て）、能く興（おこ）す（活動する）莫し。孔子、（書経を）講誦（詩経を）弦歌して衰へず」とある。山梁の雌雉は、時を知り危難を逃れるが、自分は時を得るどころか危難に陥っている。ただ、「君子は終食の間も仁に違ふこと無く、造次にも必ず是に於てし、顚沛にも必ず是に於てす（里仁篇）」といいたいのであらう。  
  
了　2017.07.17